

ハタテダイ属 *Heniochus acuminatus* (Linnaeus, 1758)**ハタテダイ** 珍しさ ★★

■ ハタテダイの背鰭は長く伸びる  
(KAUM-I. 74752, 144.1 mm SL)



■ ハタテダイの幼魚  
(KAUM-I. 94346, 24.9 mm SL)

■ ハタテダイ *Heniochus acuminatus* KAUM-I. 74752, 144.1 mm SL

【解説】ハタテダイ属は側線が尾鰭基底まで達することが特徴。本種は白地に太い黒色横帯が2本はしり、2本目の後方は黄色い。背鰭第4棘が著しく伸長することも特徴（幼魚では伸長しない）。岩礁・サンゴ礁域に生息し、単独かペアもしくは数個体の群れでみられ、後出のムレハタテダイのように数百個体による大群を作ることはない（似た環境に生息するため、両種が一時的に混じることはある）。岩礁域では付着藻類を、砂泥底では小動物を食べる。国内では青森県牛滝以南の太平洋沿岸、富山県新湊以南の日本海・東シナ海沿岸、大阪湾、伊予灘、琉球列島、南大東島、小笠原諸島に広く分布する。最も北まで分布するチョウチョウウオ科魚類のひとつである。内之浦漁港では柵網で漁獲されることが多いが、体長2～3 cmの稚魚が定置網に入ることもある。（小枝圭太）

ハタタテダイ属 *Heniochus diphreutes* Jordan, 1903

# ムレハタタテダイ 珍しさ ★★★



■ ムレハタタテダイ *Heniochus diphreutes*  
KAUM-I. 65985, 97.0 mm SL



■ ムレハタタテダイの稚魚  
(KAUM-I. 56785, 32.9 mm SL)



■ ムレハタタテダイの稚魚  
(KAUM-I. 94376, 11.4 mm SL)

【解説】ハタタテダイに非常に良く似るが、ハタタテダイの背鰭棘数が 11 であるのに対し、ムレハタタテダイでは 12 であることで識別できる。水中では棘数による識別は出来ないが、ムレハタタテダイは胸部腹縁が膨らみ“ハト胸”であることで、膨らまないハタタテダイと識別可能。また、ハタタテダイが群れても数個体であるのに対し、ムレハタタテダイは名のとおり数十～数百個体の大きな群れを形成することも特徴といえる。ハタタテダイと比べると、やや潮通しの良い場所を好むが、同所的にも生息する。中底層を泳ぎ、動物プランクトンを食べる。白、黒、黄色のコントラストが美しい魚で、大群で泳ぐ姿は青い海にも良く映えるため、ダイバーからの人気が高い。国内では千葉県館山以南の太平洋沿岸、山口県以南の日本海・東シナ海沿岸、琉球列島、八丈島～小笠原諸島に分布する。チョウチョウウオ科魚類のなかではやや北に分布する種で、南日本沿岸でも成魚の群れが普通にみられる。(小枝圭太)



ゲンロクダイ属 *Roa modesta* (Temminck & Schlegel, 1844)**ゲンロクダイ** 珍しさ ★★★■ ゲンロクダイ *Roa modesta* KAUM-I. 71448, 87.6 mm SL

【解説】体は白色で頭部に1本、体に3本の黄色横帯がある。稚魚にはこれら明瞭な縞模様はない。体高が高く、背鰭第3～4棘が長いことが特徴。ながくチョウチョウウオ属に含まれていたが、近年では別属であるゲンロクダイ属に含まれている。水深50～200 mの岩礁域に生息するが、鹿児島湾では水深10 mほどの浅海でみられた。津軽海峡以南の日本海・東シナ海・太平洋沿岸、東シナ海南部大陸棚域、沖縄島に分布。国外では、韓国、中国、台湾などに分布し、東アジアに固有の種といえる。本科魚類のなかでも最も北に分布する種のひとつである。内之浦湾では成魚だけでなく、写真のようなトリクチス期の稚魚も稀に定置網に入る。(小枝圭太)

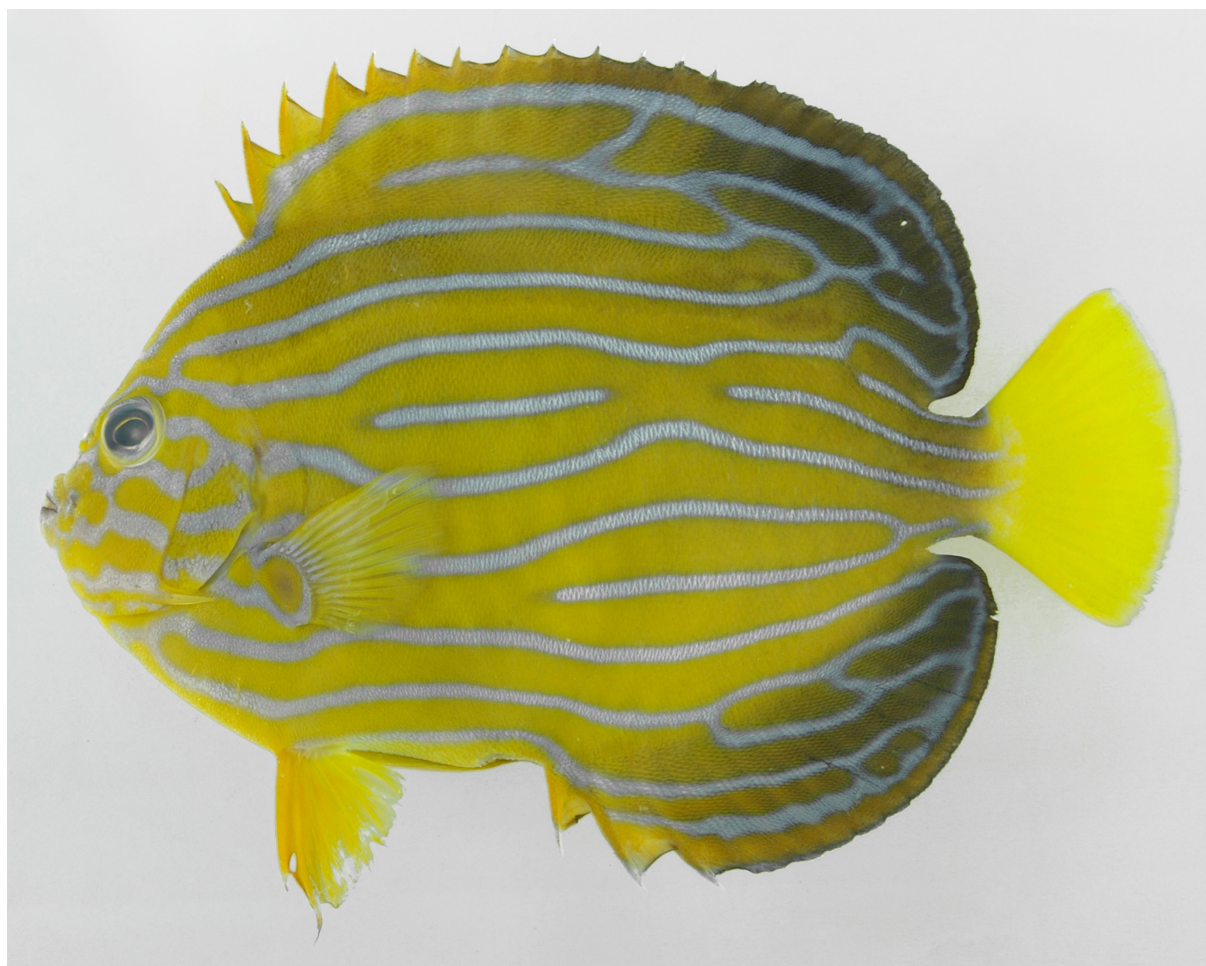
■ ゲンロクダイの稚魚 (KAUM-I. 51119, 12.9 mm SL)



キンチャクダイ属 *Chaetodontoplus septentrionalis* (Temminck & Schlegel, 1844)

# キンチャクダイ

珍しさ ★★★★★



■ キンチャクダイ *Chaetodontoplus septentrionalis* KAUM-I. 7552, 128.2 mm SL

【解説】キンチャクダイ科は成魚と幼魚で色彩が大きく異なる種が多い。本種も成魚は体が黄色で体側全体に青色縦帯があるが、幼魚では地色が黒色で、頭部から腹部にかけて明瞭な黄色横帯が1本はしる。岩礁域に生息する。本科魚類のなかで最も北方に適応した種で、国内では宮城県石巻以南の太平洋沿岸、山形県以南の日本海・東シナ海沿岸、播磨灘、口永良部島、小笠原諸島に分布する。国外では韓国の済州島や台湾、中国の広東省、ベトナムから知られる。キンチャクダイ科の多くは臭みが強く不味であるとされ、本種も食用にされることはない。内之浦漁港では成魚も幼魚も漁獲されるが、いずれも数は多くない。

(小枝圭太)



■ キンチャクダイの幼魚 (KAUM-I. 56950, 34.5 mm SL)



サザナミヤッコ属 *Pomacanthus imperator* (Bloch, 1787)

## タテジマキンチャクダイ

珍しさ ★★★★★

■ タテジマキンチャクダイ *Pomacanthus imperator* KAUM-I. 74769, 252.9 mm SL

【解説】成魚の体は黄色と青色の斜め縞模様で、頭部には眼を通る黒色横帯がある。幼魚はサザナミヤッコの幼魚に似るが、白色と青色のラインが輪状であることで輪状にならないサザナミヤッコの幼魚と識別できる。成魚、幼魚ともに特徴的かつ美しい体色のため、観賞魚としての人気が高く、ペットショップや水族館でよくみられる。華やかな外見に似合わず、前鰓蓋には強大な棘をもつ。サンゴ礁・岩礁域に分布し、サザナミヤッコと比べるとやや深く、潮通しの良い場所に多い傾向がある。危険を察知すると岩の下やサンゴの陰に逃げ込み、その場で反転して隠れ場所から様子を窺う習性がある。国内では茨城県鹿島灘以南の太平洋沿岸と琉球列島、南大東島、伊豆諸島から小笠原諸島に分布している。琉球列島ではごく普通にみられるが、南日本では少ない。内之浦漁港では大型個体の成魚2個体が得られており、幼魚は採集されていない。(小枝圭太)



■ 飼育されたタテジマキンチャクダイ (2008年5月12日撮影)



サザナミヤッコ属 *Pomacanthus semicirculatus* (Cuvier, 1831)

**サザナミヤッコ**

珍しさ ★★★★★



■ サザナミヤッコ *Pomacanthus semicirculatus* KAUM-I. 65656, 277.4 mm SL

【解説】成魚は体が黄緑色で細かい暗色斑が散在する。鰓蓋骨や前鰓蓋骨、背鰭、臀鰭の後縁が鮮やかな青色で縁どられる。とりわけ鰓蓋の青色は生時、水中で輝くように美しい。幼魚は黒色の体に青色と白色の細い横帯が縞模様を形成して美しいため、観賞魚としての人気が高い。和名の「サザナミ」はこの幼魚期の色彩に由来する。サンゴ礁・岩礁域に生息する。タテジマキンチャクダイと同様に危険を感じると岩陰に入り、危険の対象の動きを見る習性があるようである。サンゴ礁域では、幼魚がごく浅いタイドプール（潮だまり）に取り残されていることがある。鰓蓋の棘が意外に強力なので、生体を扱う際は注意が必要。インド・太平洋に広く分布し、国内では茨城県鹿島灘以南の太平洋沿岸、長崎県壱岐、五島列島、鹿児島県薩摩川内、琉球列島、尖閣諸島、南大東島、伊豆諸島から小笠原諸島に分布する。琉球列島ではごく一般的にみられるが、南日本沿岸では少ない。内之浦漁港では、体長 27 cm の成魚（KAUM-I. 65656）が 1 個体のみ得られている。沖縄県ではごく稀に市場に並ぶが、基本的には食用にしない。身は軟らかく、臭みが強く、不味であった。（小枝圭太）



■ サザナミヤッコの鰓蓋の棘は鋭い（KAUM-I. 65656）

テングダイ属 *Evistias acutirostris* (Temminck & Schlegel, 1844)**テングダイ** 珍しさ ★★★■ テングダイ *Evistias acutirostris* (2005年4月7日撮影)

【解説】カワビシャ科魚類は体高が非常に高く、大きい背鰭をもつことが特徴。本種は背鰭棘と臀鰭棘が短いことで似たカワビシャ（本書未掲載）と区別される。成魚は黄色い体に褐色横帯が複数はしるが、幼魚の体側には虫食い模様や斑点が散在する。「テング」の名の通り、吻が突出する。水深 18 ~ 250 m の砂底や岩礁域に生息し、岩の下などで動かずじっとしていることが多い。日本、朝鮮半島南岸、済州島、台湾南部、オーストラリアのロードハウ島、ニュージーランド、ハワイ諸島から知られる。国内では北海道から九州南岸、沖縄県伊江島、八丈島～小笠原諸島に広く分布する。科名であるカワビシャの「カワ」は皮が厚いことに由来するとされ、「ビシャ」は菱型あるいは縞模様由来するとする説がある。内之浦において成魚は非常に稀で、1 個体のみ写真による記録がある。幼魚は時折みられる。（小枝圭太）



■ テングダイの幼魚 (KAUM-I. 89499, 61.8 mm SL)



オキゴンベ属 *Cirrhichthys aureus* (Temminck & Schlegel, 1843)

**オキゴンベ** 珍しさ ★★★★★



■ オキゴンベ *Cirrhichthys aureus* KAUM-I. 83918, 59.1 mm SL(上), KAUM-I. 57302, 89.1 mm SL(下)

【解説】体色は一様に黄色で、体側に不明瞭な暗色斑がある、背鰭に斑紋はない、体高が高いことが特徴。水深 40 m より浅いサンゴ礁や岩礁域に生息する。岩やサンゴの上に乗し、数十 cm から数 m 移動しては止まり、また移動しては止まりを繰り返す。産卵期は夏で、日没直後に抱卵・放精することが知られている。国内では新潟県以南の日本海・東シナ海沿岸と千葉県館山以南の太平洋沿岸、屋久島に分布する。本科魚類としては、温帯域に多くみられる限られた種である。最大でも体長 12 cm ほどで食用にはならない。(小枝圭太)



タカノハダイ属 *Goniistius zebra* (Döderlein, 1883)

ミギマキ

珍しさ ★★



■ ミギマキ *Goniistius zebra* KAUM-I. 82777, 247.2 mm SL (上), KAUM-I. 71421, 200.8 mm SL (下)

【解説】黄色の体に紺色横帯が複数はしる。尾鰭の下葉は紺色。唇は赤い。胸鰭下部の各軟条は伸長する。浅場の岩礁域や港内などやや穏やかな場所に生息する。動きは遅く、海底や岩の下でじっとしていることが多い。小型の底生動物を食べる。国内では千葉県外房以南の太平洋沿岸域と琉球列島、小笠原諸島に分布するが、温帯域で多く、熱帯の島嶼域では少ない。内之浦漁港を含め、鹿児島ではタカノハダイなどと総称して「ひだりまき」と呼ばれることが多い。やや臭みがあることと、タカノハダイと比較してやや小型であることから食用としての価値は低く、小型のものは投棄されている。(小枝圭太)

タカノハダイ属 *Goniistius zonatus* (Cuvier, 1830)

# タカノハダイ 珍しさ ★



■ タカノハダイ *Goniistius zonatus* KAUM-I. 94404, 310.1 mm SL

【解説】ミギマキと似た体形と模様をもつが、縞模様が紺色ではなく黄土色。また、尾鰭が2色で塗り分けられておらず、茶色に白色小斑が散在していることで容易に識別される。海藻が生えている岩場に生息し、消波ブロックの周囲やそのなかの暗がりですじと動かない姿がよくみられる。日本、朝鮮半島南岸、台湾、香港に分布し、国内では津軽海峡以南の広い範囲でごく普通にみられるが、琉球列島ではやや数が少ない。臭みが強いので不味であるとの意見が多いが、冬に採れた鮮度が良いものはしっかりとした身質に旨味があり美味であった。内之浦漁港では定置網より、釣りで漁獲されることが多く、活かした状態で市場にでることも珍しくない。定置網では成魚だけでなく、体色が一様に銀色の稚魚や成魚と同じ色彩が現れて間もない幼魚も得られる。鹿児島県では同属のミギマキと区別するためか、本種を「ひだりまき」と呼ぶことが多い。(小枝圭太)



■ タカノハダイの幼魚 (KAUM-I. 86548, 44.5 mm SL)





■ タカノハダイの稚魚 (KAUM-I. 29071, 33.3 mm SL)

アカタチ属 *Acanthocepola indica* (Day, 1888)

**インドアカタチ** 珍しさ ★★★★★



■ インドアカタチ *Acanthocepola indica* KAUM-I. 74747, 183.8 mm SL

【解説】アカタチ属魚類は体高が著しく低く、リボン状に強く側扁し、細長い体をもつ。背鰭・臀鰭基底が長く、尾鰭と連続する。本種は背鰭前部に不明瞭な黒斑があり、体にはオレンジ色の細長い横帯が多数あることが特徴だが、写真の個体のように横帯が不明瞭なものもある。背鰭軟条数が85程度であることも特徴。本科魚類の多くは、軟泥底に穴を掘り、その中から伸びるように立ち泳ぎをしながら餌を食べる習性がある。水深約3～300 mと幅広い水深帯に生息している。日本や台湾、中国の広東省、海南島、インドのマドラスから知られ、国内ではこれまで土佐湾、東シナ海と非常に限られた場所からのみ記録されていた。内之浦漁港から得られた写真の標本は九州沿岸域からの標本に基づく初めての記録である。体高が低く、著しく側扁しているため身は少ないものの、塩焼きや煮付で美味とされる。

(小枝圭太)



■ インドアカタチの頭部 (KAUM-I. 74747)



オヤビツチャ属 *Abudefduf vaigiensis* (Quoy & Gaimard, 1825)

**オヤビツチャ** 珍しさ ★★



■ オヤビツチャ *Abudefduf vaigiensis* KAUM-I. 63205, 151.7 mm SL

【解説】スズメダイ科としてはやや大型で体長は 17 cm に達する。白い体に 5 本の黒色帯がはしり、尾鰭に模様がないことが特徴。また、体背部は黄色い。水深 1 ~ 12 m でみられ、内湾、サンゴ礁域、岩礁域と浅海域であれば基本的にどこでもみられる。国内では青森県以南の全域に分布するとされていたが、近年では北海道沿岸からの報告も散見されるという。ただし、東北地方などにみられる個体は、冬季の低水温のために死亡する死滅回遊であることが示されている（木村、2017）。琉球列島の北中部（特に口永良部島や奄美地方）では「ヘキ」や「ヒキ」、「ピキ」、「アヤビキ」などと呼ばれ、釣りや追い込み漁により漁獲され、食用として重宝されている。唐揚げや塩焼きで食する。内之浦漁港では定置網の周りでは数多くみられるものの、網に入ることは多くない。近年、本種に非常に類似するシリテンスズメダイ *Abudefduf caudobimaculatus*（本書未掲載）の有効性が Wibowo et al. (2017) により示された。これ以外にもオヤビツチャ属魚類には隠蔽種（形態での区別が難しく、これまで同種として扱われてきたが、実際には別種として分けられるべき種）が数多く含まれると考えられており、現在、鹿児島大学大学院の Kunto Wibowo 氏により研究が進められている。（小枝圭太）



■ オヤビツチャの幼魚 (KAUM-I. 82778, 31.2 mm SL)



スズメダイ属 *Chromis fumea* (Tanaka, 1917)**マツバスズメダイ**

珍しさ ★★★



■ マツバスズメダイ *Chromis fumea* KAUM-I. 82783, 32.4 mm SL (上), KAUM-I. 44864, 40.1 mm SL (下)

【解説】背鰭の先端が黒ずみ、尾鰭にははっきりとした八の字ラインがあることが特徴。水深 15 m 以浅の岩礁域の中層で小さな群れを作る。伊豆半島での産卵期は初夏から夏で、オスはこの時期になると全体が青く輝く婚姻色を呈する。温帯域に適応した種であり、国内では秋田県以南の日本海・東シナ海沿岸と千葉県外房以南の太平洋沿岸、沖縄諸島の伊江島、石垣島で分布が確認されている。体長 10 cm と小型であり食用にはならない。(小枝圭太)

ミスジリュウキュウスズメダイ属 *Dascyllus trimaculatus* (Rüppell, 1829)

ミツボシクロスズメダイ

珍しさ ★★★★★



■ ミツボシクロスズメダイ *Dascyllus trimaculatus* KAUM-I. 61528, 90.7 mm SL

【解説】体高が非常に高く、全体に丸い。体はほぼ一様に黒く、背部に明瞭な白色斑が1つある。大型個体では黒色がやや淡くなり、鱗にそった黒色域が目立つようになる。水深1 mの浅場から55 mまでのサンゴ礁域、岩礁域に生息する。幼魚はクマノミ類と共にイソギンチャク類と共生することが多いが、枝状サンゴなどの近くに棲み、イソギンチャク類と共生しない個体も普通にみられる。成魚は気が強く、ダイバーに果敢に噛みついてくることもある。Koeda et al. (2016b) は、与那国島から本種の白色変異個体（パイポールド）の水中写真を報告した。国内では千葉県外房以南の太平洋沿岸、琉球列島、八丈島から小笠原諸島に分布する。体高が高いため比較的大型のスズメダイ科魚類といえるものの、オヤビッチャなどと違い群れで大量に採れることがないため、食用とはならない。内之浦では極めて稀で、調査を通じて写真の1標本が得られたのみ。（小枝圭太）



スジスズメダイ属 *Teixeirichthys jordani* (Rutter, 1897)**スジスズメダイ**

珍しさ ★★★★★

■ スジスズメダイ *Teixeirichthys jordani* KAUM-I. 56780, 134.5 mm SL

【解説】体高は低く、やや細長い。体は薄青色で、体側にやや濃い青色の縦帯が複数はしる。縦列鱗数が44～45であることが特徴。水深4～20 mの開けた砂底域や砂礫底域、藻場などに生息し、海底に沈んだ人工物や流木などの構造物を隠れ場所として、その周囲に群れで生活する(加藤、2011)。一見すると地味な体色だが、水中でみると青紫色の小斑点がキラキラと輝き、綺麗な魚である。国内では、伊豆半島西岸、土佐湾、鹿児島県内之浦、屋久島から分布が記録されている。(小枝圭太)

■ スジスズメダイ *Teixeirichthys jordani* (2007年2月20日撮影)



シマイサキ属 *Rhynchopelates oxyrhynchus* (Temminck & Schlegel, 1843)

**シマイサキ** 珍しさ ★★★★★



■ シマイサキ *Rhynchopelates oxyrhynchus* (2007 年 6 月 7 日撮影)

【解説】体はやや細長く、吻がよく尖り、口が小さい。体側に 3 本の暗色縦帯が直線的にはしり（大型個体ではこの間にさらに複数本の暗色縦帯がある）、うち体側中央の 1 本が尾鰭基部に達する。体は櫛鱗で覆われ、ざらざらしている。鰾（うきぶくろ）を使って鳴くことができ、漁獲された際にはググウと音を出す。日本、韓国、中国、台湾、フィリピンのルソン島などに分布する。国内では津軽海峡以南の日本海・東シナ海・太平洋沿岸、瀬戸内海に分布するが、沖縄諸島の久米島からの記録もある。美味な魚で、全国的に食用魚として知られるが、九州とくに鹿児島県では個体数が少なく、あまり馴染みのない魚といえる。内之浦でも個体数は非常に少なく、標本は残っていない。（小枝圭太）



■ 市場に並ぶコトヒキ *Terapon jarbua* (2013 年 10 月 10 日撮影；解説は次のページ)



コトヒキ属 *Terapon jarbua* (Forsskal, 1775)**コトヒキ** 珍しさ ★

■ コトヒキ *Terapon jarbua* KAUM-I. 82754, 143.5 mm SL (上), KAUM-I. 78165, 125.1 mm SL (下)

【解説】銀白色の体に頭後部、背鰭起部から尾柄にむかって弓なりの黒色帯がある。また、尾鰭には3～5本の幅広い黒色帯がある。シマイサキと同様に、鰾（うきぶくろ）をつかって音をたてることができる。沿岸浅場や河川汽水域の水深数 cm の場所にも出現し、驚くと砂に潜る。小型の甲殻類などを捕食する。また、自分より大きな魚に体当たりし、剥がれた鱗を食べる「鱗食」という独特な生態をもつ（Whitfield and Blaber, 1978）。国内ほぼ全域に分布し、南ほど多い傾向がある。熱帯域を中心に食用とされているが、身はやや淡白で脂ののりが少ない印象。内之浦漁港では大型個体のみ選別される、あるいは他種とまとめられ、「雑魚」として市場に並ぶ。（小枝圭太）



コヒキ属 *Terapon theraps* Cuvier, 1829

**ヒメコトヒキ** 珍しさ ★★★★★



■ ヒメコトヒキ *Terapon theraps* KAUM-I. 14712, 111.5 mm SL

【解説】体形はコヒキによく似るが、体側の3本の黒色縦帯が直線状であることで簡単に区別できる。内湾など沿岸の浅場に生息し、幼魚は漂流物に付く。国内では秋田県男鹿半島以南の日本海沿岸と茨城県以南の太平洋沿岸、沖縄島、西表島、小笠原諸島に分布するとされるが、いずれの場所でもコヒキと比べると圧倒的に個体数が少ない。味はコヒキと似ているとされるが、不明。内之浦漁港でも稀で、小型の個体が多い。漁獲される際は数個体がまとめて入網することから、コヒキと同様に数個体の小群で行動していると考えられる。(小枝圭太)



■ ヒメコトヒキの幼魚 (KAUM-I. 63688, 63.9 mm SL)



タカベ属 *Labracoglossa argentiventris* Peters, 1866**タカベ** 珍しさ ★★■ タカベ *Labracoglossa argentiventris* KAUM-I. 98054, 141.3 mm SL■ タカベ *Labracoglossa argentiventris* KAUM-I. 62428, 97.1 mm SL

【解説】一見するとフエダイ科のウメイロ、タカサゴ科のウメイロモドキ（本書未掲載）、ササムロなどの小型個体に似るが、体側に細長い縦線が複数はしることで識別される。また、背鰭や臀鰭の軟条数も多い。沿岸の岩礁域の表層から中層に群泳し、動物プランクトンを食べる。国内では茨城県以南の太平洋沿岸、若狭湾以南の日本海沿岸、八丈島から小笠原諸島に分布する。本種は体長 20 cm を越えるが、内之浦漁港では体長 10 cm 前後の小型個体のみが網に入る。また、港内を小型個体が群泳している姿もみることができる。関東地方や和歌山県などの紀伊地方では食用とされるが、内之浦漁港では大型個体があまり採れないためか食用とされることはない。（小枝圭太）

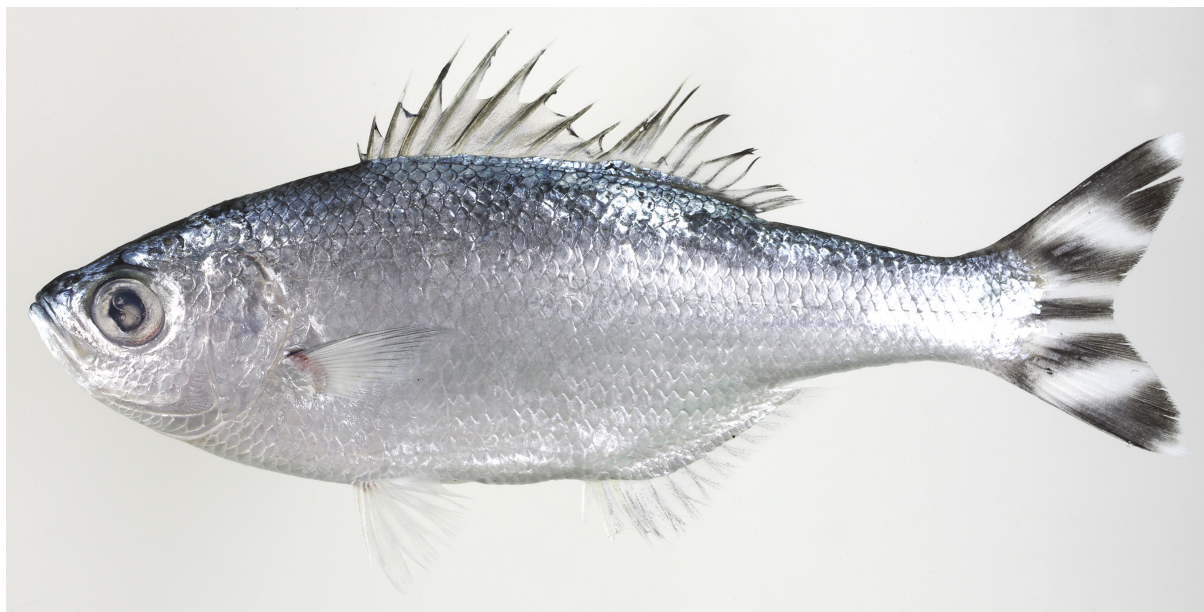


■ タカベの幼魚  
(KAUM-I. 83760, 54.4 mm SL)



ユゴイ属 *Kuhlia mugil* (Forster, 1801)

**ギンユゴイ** 珍しさ ★★★★★



■ ギンユゴイ *Kuhlia mugil* KAUM-I. 80377, 188.0 mm SL



■ ギンユゴイ *Kuhlia mugil* KAUM-I. 57286, 132.9 mm SL

【解説】体はよく側扁し、体は銀白色に輝き、尾鰭の上下葉に黒色斜帯があることが特徴。ユゴイ科魚類の多くは生活史の大部分を淡水域で過ごす但、本種は一生を通じて海水域で過ごすことが知られる。幼魚はタイドプール（潮だまり）に出現する代表的な種で、成魚は波が打ち付ける潮通しの良い場所の表層付近で群れを作る。大型個体の群れは稀に数百個体にもなる。夜にも釣れることから、昼夜ともに活動的であると推察される。インド・汎太平洋の熱帯・亜熱帯域に広く分布し、国内では茨城県以南の太平洋沿岸、対馬、九州北岸・西岸、琉球列島、小笠原諸島から知られる。体長 20 cm ほどの大型の個体は引きもそれなりで、釣れ始めると次々と釣れることから、沖縄県の離島などでは釣り魚として親しまれ、食用とされている。内之浦漁港では非常に稀で、体長 13 cm と 18 cm の 2 個体が得られたのみ。他の南日本沿岸地域でも大型個体が大量に漁獲されることはあまりないため、食用として利用されることは稀であろう。（小枝圭太）



イシダイ属 *Oplegnathus fasciatus* (Temminck & Schlegel, 1844)**イシダイ** 珍しさ ★★■ イシダイ *Oplegnathus fasciatus* KAUM-I. 86395, 288.5 mm SL

【解説】体は灰白色を呈し、細い黒色横帯が多数はいる（写真は中型個体）。幼魚は地色の白色と黒色横帯のコントラストが強い。老成魚では体は一様に暗い灰色となり、口の周辺のみが黒色となる。幼魚は流れ藻などに随伴する性質が知られ（小林、1995）、浮遊期から流れ藻に随伴する時期にかけては橈脚類やカイアシ類をおもな餌とする。着底後、体長 10 cm を越えるとゴカイ類も餌とし、その後成長に伴いヒザラガイや貝類、ウニなどの定着性動物を幅広く餌とするようになる（塩屋・原田、1975）。肉質は歯ごたえに富み、非常に美味なため高級魚として知られ、高価に取引される。成長が遅く、市場価値の高くなる体長 30 cm に達するまでに 3 年以上を要するため、養殖はほとんどおこなわれておらず、市場流通する個体のほとんどは天然個体である（平本、1981）。内之浦湾においては成魚が多く釣獲され、活魚として市場にだされることが多い。内之浦湾において幼魚が漁獲されることはほとんどない。非常に力の強い魚で、釣り魚として高い人気を誇るが、大型個体は並みの竿では太刀打ちできない。（畑 晴陵）



■ 活魚とされるイシダイとイシガキダイ(2014 年 3 月 29 日撮影)



イシダイ属 *Oplegnathus punctatus* (Temminck & Schlegel, 1844)

# イシガキダイ 珍しさ ★★



■ イシガキダイ *Oplegnathus punctatus* KAUM-I. 98046, 179.3 mm SL

【解説】体形はイシダイに類似するが、体には横帯ではなく黒色斑が密にはいり、石垣模様を為す。また、老成魚の体は青みがかった黒色となり、口の周辺のみが白色となる。イシダイと同様に、幼魚期は流れ藻に随伴する性質があり、成長に伴いおもな餌を動物プランクトンからウニや貝類などの底生性生物に変化させる（塩屋・原田、1975）。イシダイとの天然交雑個体が多く報告されており、交雑個体の体側には細い黒色横帯が多数はいり、その間に黒色斑が散在する、両種の間のような模様をもつことが知られている（亀井・高間、1981；川崎、2009；末吉ほか、2009；読売新聞、2010）。

交雑個体は養殖状況下においてイシダイよりも成長が速く、生存率が高く、またイシガキダイよりも生殖能力に富むことから、養殖対象として有力視されている（亀井・高間、1981；村田、1998）。交雑個体は「イシガキイシダイ」などと称されることがあるが（鈴木、2003；読売新聞、2010）、2 種間の人工交配技術は近畿大学が特許権を取得しており、交配個体は「キンダイ」と名付けられている。イシガキダイの食味はイシダイに比肩する美味なものであり、高級魚として扱われる。内之浦湾においてはイシダイ同様に多くが釣獲され、活魚として市場に並ぶことが多く、幼魚の漁獲は少ない。イシダイ同様、釣り魚として非常に人気が高い。（畑 晴陵）



■ イシガキダイ KAUM-I. 98047, 207.1 mm SL



イスズミ属 *Kyphosus bigibbus* Lacepède, 1801**ノトイスズミ** 珍しさ ★★★★★■ ノトイスズミ *Kyphosus bigibbus* KAUM-I. 94407, 331.0 mm SL

【解説】 イスズミとよく似るが、イスズミと比較して体色が暗く、茶色がかかること、背鰭と臀鰭の軟条数がそれぞれ 12 と 11 であることにより識別される。南日本においては稀な魚ではないものの、長らくイスズミと混同されてきた。能登半島で大量に水揚げされるイスズミの中に形態的に異なる 2 型が含まれることをきっかけに研究が開始され（坂井、2004）、坂井（1991）によってイスズミとの識別点を示されると同時に和名ノトイスズミが提唱された。その後 Sakai and Nakabo (2004) によってノトイスズミに適用すべき学名が *K. bigibbus* であることが示された。内之浦湾においては、おもに定置網によって漁獲され、イスズミと区別なく扱われる。（畑 晴陵）

イスズミ属 *Kyphosus cinerascens* (Forsskal, 1775)**テンジクイサキ** 珍しさ ★★★★★

【解説】 背鰭軟条部前部が高く、最長背鰭棘よりも長い。また、体背縁が背鰭基底中央で急に下降し、体腹縁が臀鰭起部付近で急に上昇する独特の体型により、日本産同科他種と容易に識別される（Sakai and Nakabo, 2006）。北海道以南の日本各地に広く分布する。琉球列島においては珍しい魚ではないが、内之浦湾においては極めて稀な種であり、写真の個体の水揚げが確認されたのみである。イスズミ類に共通して言えることであるが、藻類をおもな餌とし、腸内は藻類に満たされていることが多い。これが非常に腐りやすく、標本作成の際には防腐処理に注意が必要な類の魚である。奄美群島においては他のイスズミ科魚類との区別なく扱われており、内之浦においてもイスズミと同様に消費されるものと思われる。（畑 晴陵）

■ テンジクイサキ *Kyphosus cinerascens*  
(2014 年 1 月 25 日撮影)

イスズミ属 *Kyphosus pacificus* Sakai & Nakabo, 2004

**ミナミイスズミ**

珍しさ ★★★★★



■ 市場に並ぶミナミイスズミ *Kyphosus pacificus* (2013年10月10日撮影)

【解説】イスズミやノトイスズミに似るが吻端が突出することで識別される。通常、体は一様に銀色であるが、時折、全身が黄色の個体が出現することが知られる。黄化個体の出現はイスズミ科魚類において本種にのみ報告される現象であるが、黄化個体の黄色域は変異が大きく、黄色と黒のまだら模様の個体や、体は黒色で、頭部のみ黄色の個体が出現することもある。さらに、黄色ではなく白色個体の存在も知られる（荒賀、1997; Kuriwa et al., 2014）。黄色個体は小笠原群島において多く観察され、その南方に位置する火山列島においてはさらに高い割合で観察される（吉田朋弘氏、私信）。琉球列島において黄色個体はほとんど観察されない。ミナミイスズミは Zama (1976) によって口永良部島、八丈島、および小笠原諸島から得られた個体に基づき、*Kyphosus bigibbus* Lacepède, 1801（この学名は現在ノトイスズミに適用されている）として日本から初めて記録された。その後、ミナミイスズミに適用すべき学名は長らく不明であったが、Sakai and Nakabo (2004) によって新種として記載された。ミナミイスズミは伊豆諸島近海では珍しく、イスズミよりも数が少ないが、その南に位置する豆南諸島や小笠原諸島においては普通種であり、イスズミ類の中で最も個体数が多い（Kuriwa et al., 2014）。イスズミが多獲される内之浦湾においては極めて稀であり、2013年10月10日に市場に並んだ個体の写真が確認されたのみ。（畑 晴陵）



イスズミ属 *Kyphosus vaigiensis* (Quoy & Gaimard, 1825)

イスズミ 珍しさ ★★

■ イスズミ *Kyphosus vaigiensis* KAUM-I. 94408, 323.0 mm SL

【解説】背鰭軟条数が 14、臀鰭軟条数が 13 と多いことで、インド・太平洋産の同属他種と識別できる (Sakai and Nakabo, 1995)。体は一様に銀白色を呈し、細い金色縦帯が多数ある。幼魚の体には白色斑が散在する。本属魚類は時としてメジナ科魚類と混同されることがあるが、イスズミ属では両顎の外列歯が単尖頭であるのに対し、メジナ科では三尖頭であることにより識別される。イスズミ科魚類は互いに似通っており識別が難しく、分類学的に著しく混乱してきた。イスズミに対しては長らく *Kyphosus lembus* という学名が適用されてきたが、Sakai and Nakabo (1995) により、*K. lembus* は *K. vaigiensis* の新参異名であることが示された。イスズミは内之浦湾においてはおもに定置網によって、幼魚から体長 50 cm 程度の大型個体まで、様々な体サイズの個体が頻繁に得られる。「ひつお」などと称される。味は典型的な熱帯性草食性魚類のものであり、刺身などにして賞味される。(畑 晴陵)



■ イスズミの幼魚 (KAUM-I. 60154, 114.1 mm SL)



カゴカキダイ属 *Microcanthus strigatus* (Cuvier, 1831)

# カゴカキダイ 珍しさ ★



■ カゴカキダイ *Microcanthus strigatus* KAUM-I. 94336, 132.5 mm SL

【解説】チョウチョウウオ科のような体の形をしているが、仔稚魚期にトリクチス期幼生（チョウチョウウオ科を参照）を経ない。体は黄色で5本の黒色縦帯がある。成魚は潮通しのよい岩礁域でみられ、幼魚は潮だまりや穏やかな波打ち際に多い。国内では青森県～九州南岸のほぼ全域、琉球列島に分布する。琉球列島では水深 100 m 付近の深場に多いが、数 m の浅場にも出現する。内之浦漁港では定置網や桁網によって数多く漁獲される。これらは選別されて「かごかき」の名で市場に並ぶ。「年中脂がのっていて旨い」と多くの漁業関係者が口を揃える通り、塩焼きなどでとても美味しい魚である。しかし、あまり大きくならないためか、高くと 1 kg あたり 200 円程度と市場での価値は低い。（小枝圭太）



■ カゴカキダイ KAUM-I. 97491, 116.4 mm SL





■ 市場に並ぶカゴカキダイ (2017 年 1 月 11 日撮影)



■ 市場に並ぶカゴカキダイ（2013年10月10日撮影）



メジナ属 *Girella leonina* (Richardson, 1846)

**クロメジナ** 珍しさ ★★



■ クロメジナ *Girella leonina* KAUM-I. 73971, 55.4 mm SL



■ クロメジナ *Girella leonina* KAUM-I. 62424, 50.9 mm SL

【解説】体は緑がかった黒色。鰓蓋後縁は黒く縁どられ、成魚では尾鰭は長く、その後縁は切れ込む（写真はいずれも幼魚）。本科魚類に共通の特徴として、両顎の外列歯の先端は三尖頭を呈し、岩などに生えた海藻をついばむのに適した形となっている。産卵期は冬。稚魚・幼魚は内湾に多く生息し、冬から春にかけては潮だまりにも多く出現するが、成長に伴い外洋に面した磯へと移動することが知られている（荒賀、1997；紀伊民報、2008）。日本の他に韓国、台湾、香港、ミッドウェー諸島（稀）に分布する。国内では青森県以南に広く分布するが、琉球列島や小笠原諸島など亜熱帯の島嶼域では稀。内之浦湾においても出現するものの多くは体長数 cm の幼魚がほとんどで、成魚の漁獲は少なく、成長に伴い湾外へと移動しているものと思われる。釣りの対象魚として人気が高く、釣り人の間では「尾長グレ」などと称されるが、内之浦においてはメジナと同様に「クリ」と称される。（畑 晴陵）



メジナ属 *Girella punctata* Gray, 1835**メジナ** 珍しさ ★■ メジナ *Girella punctata* KAUM-I. 98079, 233.4 mm SL

【解説】体は緑がかった黒色。鰓蓋後縁は黒く縁どられない。体長 20 mm 未満では甲殻類や魚卵など動物性餌生物が餌のほぼ全てを占めるが、成長に伴い植物食性が強まり、体長 140 mm では餌のほぼ全てを海藻や付着性ケイ藻類などの植物性餌生物に依存することが知られる。成長に伴い腸の屈曲が増え、体長 5 mm 未満の個体では直腸であるものが、体長 70 mm の個体では 5 屈曲点を生じ、複雑な形状となる（三郎丸・塚原、1984）。クロメジナと同様に日本国内の広域に分布する。本種は北海道からも知られるが稀。内之浦湾においては定置網、刺網、釣りなど多様な漁法により多獲され、「クリ」と称される。脂肪分に富み、美味な魚である。（畑 晴陵）

■ 水揚げされたメジナ  
(2016 年 1 月 22 日撮影)

メダイ属 *Hyperoglyphe japonica* (Döderlein, 1884)

**メダイ** 珍しさ ★★★★★



■ メダイ *Hyperoglyphe japonica* KAUM-I. 40476, 152.5mm SL (上), KAUM-I. 38833, 84.2 mm SL (下)

【解説】最大で体長 1 m に達する。成魚の体側上部は黒色、体側面から体腹面にかけては一様に灰白色を呈する。幼魚の体側には細かなうねりを伴う細い黒色縦帯が多数はいる。成魚は水温 21 度以下を好み、水深 100 m 以深におもに生息する（上野・山口、1998；河野ほか、2010）。薩南群島では多数が延縄や深海釣りによって漁獲され、「タルメ」と称される。1990 年代以降、能登半島や山口県日本海側でも大量の出現が観察されるようになった（河野ほか、2010；辻ほか、2010）。大型個体は食用魚として取引され、刺身や煮つけなどにして美味しい魚である。幼魚は流れ藻などの浮遊物に随伴する。内之浦湾の定置網には幼魚が稀に入る程度であるが、外洋に出る釣り船によって漁獲された成魚が水揚げされることもある。写真の個体はいずれも幼魚。（畑 晴陵）



イボダイ属 *Psenopsis anomala* (Temminck & Schlegel, 1844)**イボダイ** 珍しさ ★★★■ イボダイ *Psenopsis anomala* KAUM-I. 73138, 173.0 mm SL

【解説】体は銀白色を呈し、背鰭は1基。鰓蓋とその上方に黒色斑がある。体長20 cm程度に成長する。体長数cm程度の幼魚はクラゲ類に随伴する習性があり、刺胞をもつクラゲに隠れて身を守るほか、クラゲの捉えた餌を横取りしたり、時にはクラゲ自体を餌とすることもある。近年、京都府近海において大型クラゲの1種であるエチゼンクラゲが大量発生したことがあるが、この年にはイボダイも数多く漁獲されたことが報告されている（京都府立海洋センター、2008）。内之浦湾においては定置網により漁獲される。稀ではないものの、その量は少ない。身は脂肪分に富み、焼き物や干物にして美味。（畑 晴陵）

■ イボダイの幼魚 *Psenopsis anomala* (KAUM-I. 73989, 59.3 mm SL)

スジハナビラウオ属 *Psenes arafurensis* Günther, 1889

**クラゲウオ**

珍しさ ★★★★★



■ クラゲウオ *Psenes arafurensis* KAUM-I. 73961, 43.4 mm SL

【解説】吻は短く、鰓蓋上方に顕著な無鱗域がある。幼魚の体は正円形に近く、白色半透明を呈し、黒褐色斑が散在する。成長に伴い体形・体色が大きく変化する。ことで知られ、成魚では体は前後方向に卵型、一様に黒褐色となり、尾鰭が伸長する。幼魚は水面近くに多く生息し、クラゲ類や流れ藻などの浮遊物に随伴する習性がある。成魚は底生性と思われ、水深 100 m 以深から得られることが多い。最大で体長 20 cm 程度。全世界の熱帯から温帯にかけて広く分布することが知られるが、内之浦湾では稀であり、幼魚が得られているのみ。

(畑 晴陵)



■ クラゲウオの幼魚の眼はかなり大きい  
(KAUM-I. 73961, 43.4 mm SL)



スジハナビラウオ属 *Psenes cyanophrys* Valenciennes, 1833**スジハナビラウオ** 珍しさ ★★★★★■ スジハナビラウオ *Psenes cyanophrys* KAUM-I. 86541, 79.7 mm SL

【解説】体は側扁し、円盤状を呈する。体には多数の細い黒色縦帯がはいる。幼魚の体は黄色がかかるが、成魚では黒褐色。幼魚は流れ藻やクラゲ類などに多く随伴し、表層域に多いが、成魚は中層から底層に生息し、生態はよくわかっていない。世界中の暖海域に広く分布し、日本国内では千葉県以南の太平洋沿岸と石川県以南の日本海・東シナ海沿岸から知られ、小笠原諸島や琉球列島からも報告されている。内之浦湾では稀であり、幼魚が定置網により得られている。(畑 晴陵)



■ 水揚げされたスジハナビラウオ（2009年5月12日撮影）



スジハナビラウオ属 *Psenes maculatus* Lütken, 1880

**シマハナビラウオ** 珍しさ ★★★★★



■ シマハナビラウオ *Psenes maculatus* (2005年5月26日撮影)

【解説】体は前後方向に長い楕円形を呈し、一様に黒色。幼魚の体は白色で、体側には「くの字」の黒色斜帯が数本ある。太平洋の北半球側、インド洋、および大西洋の温帯域に広く分布する。日本国内においても千島列島から九州南岸にかけて記録があるが、小笠原諸島と琉球列島からの記録はない。幼魚は表層性でクラゲ類に随伴する習性がある。成魚は深海性で水深 600 m 以深に生息し、漁獲されることは極めて稀。内之浦湾においては極めて稀であり、2005 年 5 月 26 日に写真の小型個体の漁獲が確認されたのみ。内之浦湾に入った経緯は不明であるが、クラゲ類に随伴したものと思われる。(畑 晴陵)

スジハナビラウオ属 *Psenes pellucidus* Lütken, 1880

**ハナビラウオ** 珍しさ ★★★★★



■ ハナビラウオ *Psenes pellucidus* KAUM-I. 29874, 107.3 mm SL

【解説】体は成魚では前後方向に長い楕円形を呈し、一様に黒褐色。幼魚の体は円盤状であり、体色は白みが強い。成魚と幼魚で形態が大きく異なるため、幼魚は「コンニャクアジ」と称されて別種とされていたこともあった。成魚は深海に生息すると考えられているが、極めて稀であり、詳しい生態は不明。幼魚は、有毒な刺胞をそなえるクラゲ類に随伴する習性が知られる。外敵から身を守るためと考えられるが、クラゲ類の触手を、麺をすするようにして捕食する様子も観察されている(米田、2013)。内之浦湾では極めて稀に定置網により漁獲される。(畑 晴陵)

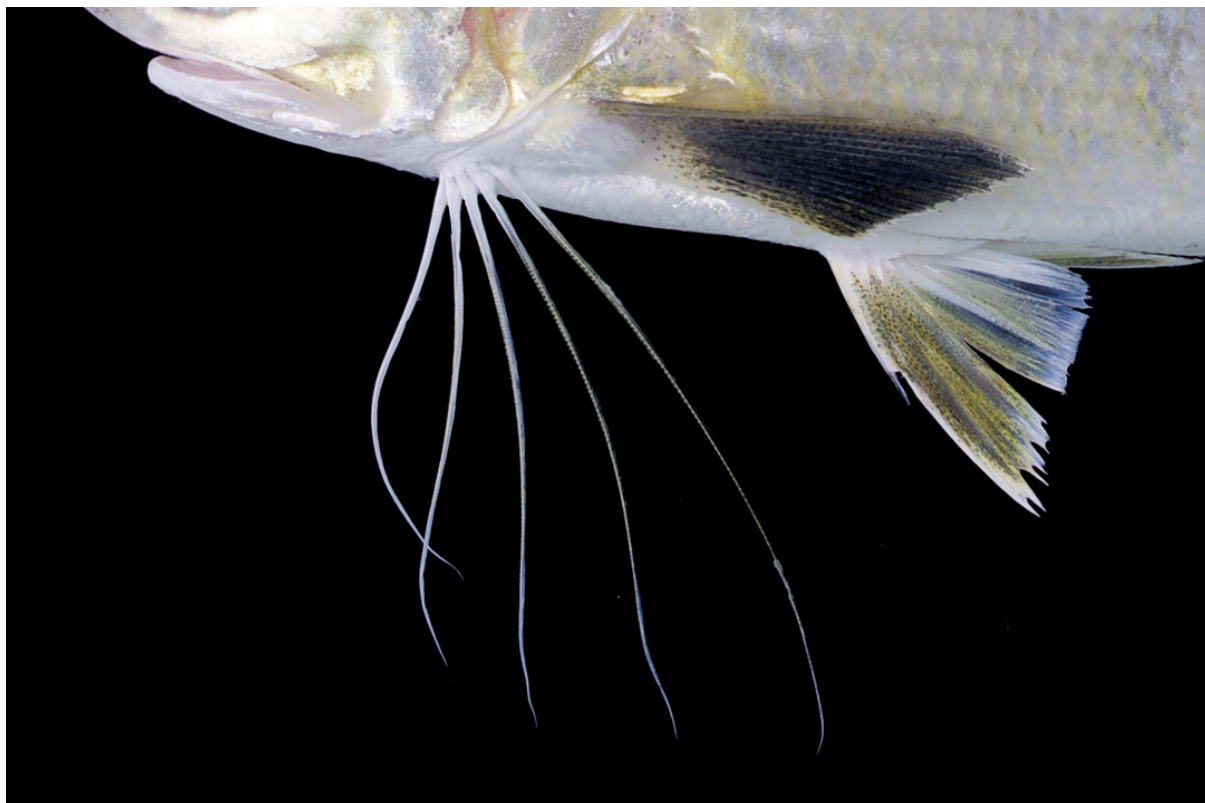


ツバメコノシロ属 *Polydactylus plebeius* (Broussonet, 1782)**ツバメコノシロ** 珍しさ ★★★■ ツバメコノシロ *Polydactylus plebeius* KAUM-I. 94334, 187.0 mm SL■ ツバメコノシロ *Polydactylus plebeius* KAUM-I. 94335, 154.4 mm SL

【解説】体は黄緑がかった銀白色を呈し、細い黒縦帯が多数ある。胸鰭は黒色。吻部は突出し、口は大きく裂け、カタクチイワシ類に似た顔つきをしている。胸鰭下部の5軟条は遊離する。普段はこれらの遊離軟条をたたみ、体に密着させて遊泳するが、索餌の際にはこれらを広げながら水底付近を遊泳し、触れた餌を捕食する（本村ほか、2002）。南アフリカから日本、フレンチポリネシアにかけて広く分布するが、紅海とペルシャ湾における記録はない。砂底または泥底の浅瀬に多く生息し、幼魚は河口の汽水域にも多数出現する。宮崎県においては6, 7, 9, 10月に多く得られることが知られるが（Motomura et al., 2001b）、内之浦湾においては秋から冬において（標本は10～12月に得られている）時折漁獲され、「アゴナシ」と称される。漁獲個体は体長20 cmほどのものがほとんどであり、食用とされることはあまりない。（畑 晴陵）



■ ツバメコノシロ *Polydactylus plebeius* KAUM-I. 82753, 171.2 mm SL



■ ツバメコノシロの胸鰭遊離軟条は糸状に伸びる (KAUM-I. 94334, 187.0 mm SL)



ツバメコノシロ属 *Polydactylus sextarius* (Bloch & Schneider, 1801)

**カタグロアゴナシ**

珍しさ ★★★★★



■ カタグロアゴナシ *Polydactylus sextarius* KAUM-I. 6490, 166.1 mm SL



■ カタグロアゴナシ *Polydactylus sextarius* KAUM-I. 10948, 124.4 mm SL

【解説】側線始部に明瞭な黒色斑があり、胸鰭下部の遊離軟条が6本であることで、日本産同科他種と容易に識別される。国外ではインド南西岸からニューギニア島、朝鮮半島にかけて広く分布する。日本国内においては稀な種であり、宮崎県南郷町、鹿児島県志布志湾、および内之浦湾の南九州太平洋沿岸からのみ記録がある。内之浦湾においても稀な魚であり、獲れる時も単独で入網する。(畑 晴陵)



スズキベラ属 *Anampses caeruleopunctatus* Rüppell, 1829

**ブチスズキベラ** 珍しさ ★★★★★



■ 市場に並ぶブチスズキベラ *Anampses caeruleopunctatus*, オス (2007 年 11 月 8 日撮影)

【解説】本種のオスは全身が青緑色で、両眼の間に青色帯があることが特徴。スズキベラ属のなかでは大型で体長 30 cm に達する。ベラ科魚類の一部の種は雌雄によって体色が異なる。本種の場合、メスは全体にやや茶色で、各鱗の中央に白色斑点があり、青緑色のオスとは明瞭に異なる。国内では千葉県館山以南の太平洋沿岸、琉球列島、尖閣諸島、南大東島、伊豆諸島～小笠原諸島に分布する。内之浦漁港においては体長約 30 cm の大型個体の 1 例のみ写真で確認されており、体色が青いことからオスであることがうかがえる。内之浦では極めて稀であるものの、大型であったためか、市場に並べられていた。(小枝圭太)



■ 水揚げされたイラ *Choerodon azurio* の大型のオス個体 (2011 年 5 月 21 日撮影)



イラ属 *Choerodon azurio* (Jordan & Snyder, 1901)

イラ 珍しさ ★

■ イラ *Choerodon azurio* KAUM-I. 63207, 148.0 mm SL

【解説】雌雄の色彩の違いはないが、大型のオスは頭部が張り出す。体色は全体に桃色で、体側前半部に太い黒色斜帯と白色斜帯が1本ずつあることが特徴。体長は最大で40 cmに達し、ベラ科魚類としてはやや大型の種である。大型個体は単独で泳ぎ回り、小・中型個体は数個体の群れで行動する。岩礁域におもに生息するが、藻場や砂礫底でもみられる。日本、韓国、台湾、中国の福建省、南シナ海沿岸、南沙諸島に分布し、国内では新潟県以南の日本海・東シナ海沿岸、千葉県館山湾以南の太平洋沿岸、瀬戸内海、奄美大島から知られる。内之浦漁港では15～20 cm前後の中型個体が時折まとまった数で水揚げされ、単独あるいはまとめて市場に並ぶ。2017年3月には定置網により体長4 cm程度の幼魚も得られた。(小枝圭太)

■ イラ *Choerodon azurio* の幼魚 (KAUM-I. 98141, 37.5 mm SL)

ササノハベラ属 *Pseudolabrus sieboldi* Mabuchi & Nakabo, 1997

## ホシササノハベラ 珍しさ ★★★★★



■ ホシササノハベラ *Pseudolabrus sieboldi* KAUM-I. 98143, 47.6 mm SL

【解説】体は全体にオレンジ色やピンク色で、背鰭と臀鰭が黄色い。頭部に暗色縦線が複数はあるが、その最も下をはしる縦線が胸鰭基部に向かわず、鰓蓋後端で止まることでよく似るアカササノハベラ（胸鰭基部に向かってのびる；本書未掲載）と識別される。浅い岩礁域で見られる普通種だが、鹿児島ではアカササノハベラよりは個体数が少ない。幼魚は色彩の変異に富み、識別が困難。日本の他には済州島と台湾に分布する。国内では津軽海峡以南の日本海・東シナ海沿岸および、千葉県以南の太平洋沿岸、屋久島、瀬戸内海、八丈島、小笠原諸島から知られる。内之浦湾にも普通に生息しているものと思われるが、定置網に入ることはほとんどない。（小枝圭太）

カミナリベラ属 *Stethojulis interrupta terina* Jordan & Snyder, 1902

## カミナリベラ 珍しさ ★★★★★



■ カミナリベラ *Stethojulis interrupta terina*, メス（2004年3月25日撮影）

【解説】本種は雌雄で体色が異なる。オスは体が緑色で頭部から背縁付近を通って尾柄に達する鮮青色の縦線がある。一方、メスは体が白色で頭部から体側中央にかけて黒色の縦帯がある。また、体側下半部には点状の斑点が並ぶことが特徴。岩礁域やサンゴ礁域の浅場でごく普通にみられる。日本、韓国、台湾、中国の広東省、香港、海南島、東沙諸島から知られ、国内では新潟県以南の日本海・東シナ海沿岸、千葉県館山以南の太平洋沿岸、琉球列島、伊豆諸島～小笠原諸島に分布する。温帯域でも普通種であるため、内之浦湾にも多数生息するものと思われるが、定置網などで混獲されるのはかなり稀。2004年3月にみられたメスの1個体のみで標本は残っていない。（小枝圭太）



ブダイ属 *Calotomus japonicus* (Valenciennes, 1840)**ブダイ** 珍しさ ★★■ ブダイ *Calotomus japonicus* KAUM-I. 98087, 356.0 mm SL, オス■ ブダイ *Calotomus japonicus* KAUM-I. 73160, 256.7 mm SL, メス

【解説】ブダイ科はほぼすべての種でオスが青色や緑色、メスが赤色や茶色と体色に顕著な違いがみられる。また、多くの種で顎歯が癒合して板状になっているが、本種は両顎歯の癒合が不完全で、歯が覆瓦状に並ぶことが特徴。オスは濃い緑色の体で、頭部はまだらに赤色。尾鰭も鮮やかな赤色。メスは全体に茶色と黄色がまだらにまじったような体色をもつ。熱帯域におもに分布する本科魚類のなかでは温帯域に適応した種であり、国内では千葉県千倉以南の太平洋沿岸、兵庫県香住以南の日本海・東シナ海沿岸、奄美大島、南大東島、伊豆諸島～小笠原諸島から知られ、三浦（2012）により沖縄島からも記録されている。藻場や礫域に生息し、海藻を食べることから「もはみ」と呼ばれることが多いが、内之浦では「もはめ」と呼ばれる。大型個体は単独で市場に並び、活魚とされることもあるが、小型個体や幼魚は得られていない。（小枝圭太）



アオブダイ属 *Scarus ghobban* Forsskal, 1775

**ヒブダイ** 珍しさ ★★★★★



■ 市場に並ぶヒブダイ *Scarus ghobban*, オス (2012 年 2 月 22 日撮影)

【解説】本種のオスの体は緑色で、尾柄部の各鱗に大きな青色斑がある。メスは黄色の体に青色の横帯が 5 本あり、尾鰭両葉の外縁部に青色縦帯があることが特徴。同定が困難なブダイ科のメスとしては特徴的で同定が容易な種である。岩礁・サンゴ礁域に生息し、普段はオスがメスと比較して深場で生息している。メスは水深数 m の浅場でも普通にみられる。国内では東京湾以南の太平洋沿岸、琉球列島、伊豆諸島から小笠原諸島に分布する。ブダイ科のなかで最も美味な種のひとつで、沖縄県では他のブダイ類を「いらぶちやー」が呼ばれるのに対し、本種だけは「あーがい」と呼ばれ、別格の扱いを受ける。内之浦ではおもに立て網により漁獲される。「はち」と呼ばれ約 5 kg にもなる大型のオスが市場に並んだ例があるが、標本は残っておらず、メスが得られた例もない。(小枝圭太)



■ 市場に並ぶヒブダイ *Scarus ghobban*, オス (2014 年 6 月撮影)



アオブダイ属 *Scarus ovifrons* Temminck & Schlegel, 1846**アオブダイ** 珍しさ ★★★★★■ 水揚げされたアオブダイ *Scarus ovifrons*, オス (2015年6月12日撮影)

【解説】本種のオスは鮮やかな青色が美しく、とりわけ大型個体は下顎後方がエメラルドグリーンとなる。また、オスの大型個体は吻端を越えるほど頭部が著しく突出する。メスはやや黒っぽいが、各鰭の外縁は鮮やかな青色。岩礁域に生息し、大型個体は単独でみかけることが多いが、中型から小型個体は10個体前後の群れをつくることが多い。ブダイと並び温帯域に適応した種であり、国内では東京湾以南の太平洋沿岸、九州北・西岸、屋久島、トカラ列島から記録されている。内臓に猛毒のパリトキシンをもつことがあるため、市場での流通・販売が自粛されている。

(小枝圭太)



■ オスのアオブダイの頭部は著しく突出する



■ アオブダイの小型個体 (KAUM-I. 82769, 297.1 mm SL)



アオブダイ属 *Scarus rivulatus* Valenciennes, 1840

**スジブダイ** 珍しさ ★★★★★



■ 市場に並ぶスジブダイ *Scarus rivulatus*, オス (2010 年 11 月 6 日撮影)

【解説】オスの体は全体に緑色で、頬部はオレンジ色、吻部に唐草模様があることが特徴。メスは緑がかった茶色で尾部から尾鰭が淡い紫色。岩礁・サンゴ礁域に生息し、オスは単独、メスは複数個体の小群でみられる。熱帯性であり、国内では高知県柏島、愛媛県愛南、琉球列島、南大東島から記録されている。内之浦漁港において2010年11月に確認された個体は体長30～40cm程度のオスで、これは九州沿岸域からの初めての記録である。ただし、標本は残っていない。ブダイ科魚類は好みが分かれるものの、本種はあまり美味でない種といえる。

(小枝圭太)



■ トラギス *Parapercis pulchella* KAUM-I. 73968, 122.7 mm SL (解説は次のページ)



トラギス属 *Parapercis pulchella* (Temminck & Schlegel, 1843)**トラギス** 珍しさ ★★★■ トラギス *Parapercis pulchella* KAUM-I. 73969, 102.0 mm SL

【解説】トラギス科は円筒形の体で、背鰭と臀鰭の基底が長い。底生性で、腹鰭をつかって海底にじっと静止し、泳いでは静止するのを繰り返す。浅場から深場まで生息するが、深場に生息する種ほど赤色やオレンジ色といった鮮やかな色彩の種が多い。本種は背鰭棘部と軟条部の間に欠刻がある、尾鰭の上葉が伸長する、体側に幅の広い6本の褐色横帯があることなどが特徴。肉食性で甲殻類、多毛類、小型魚類を捕食する。カワハギ類やキス類を狙った釣りの外道として知られる。沿岸浅場の砂礫底域に生息し、千葉県館山湾以南の太平洋沿岸、新潟県以南の日本海・東シナ海沿岸に分布する。体長は最大でも18 cmほどで食用になることはほとんどない。(小枝圭太)

トラギス属 *Parapercis randalli* Ho & Shao, 2010**ホムラトラギス** 珍しさ ★★★★★■ ホムラトラギス *Parapercis randalli* KAUM-I. 60142, 52.5 mm SL

【解説】体側背側に5つの赤褐色鞍状斑があること、腹側面に8つの赤色斑があること、尾鰭中央付近に2つの黒色斑が垂直に並ぶことが特徴。本種は2013年に日比野ほか(2013)により与論島から得られた標本に基づき日本で初めて記録された。その後、松沼ほか(2017)により内之浦湾から種の分布北限記録として報告されている。本種は水深100 mや150 mなど比較的深い場所から採集された例が多い。内之浦では水深40 mに設置された定置網によって得られており、本種の採集水深としては比較的浅いといえる。(小枝圭太)

トラギス属 *Parapercis sexfasciata* (Temminck & Schlegel, 1843)

## クラカケトラギス

珍しさ ★★★



■ クラカケトラギス *Parapercis sexfasciata* KAUM-I. 83535, 129.7 mm SL

【解説】体の背側部は赤褐色で、4個のV字型の暗色斑があり、胸鰭基部と眼下部にそれぞれ暗色帯があることが特徴。体長は最大で20 cmほど。浅海域～大陸棚砂泥域に生息し、国内では本州・四国・九州沿岸と東シナ海中部以南の大陸棚域に分布する。底曳網によってよく混獲され、カワハギ類やキス類を狙った釣りの外道としても知られる。練り製品の原料や塩焼きにも利用されることもあるが、内之浦漁港では食用とされていない。(小枝圭太)

トラギス属 *Parapercis snyderi* Jordan & Starks, 1905

## コウライトラギス

珍しさ ★★★★★



■ コウライトラギス *Parapercis snyderi* KAUM-I. 57295, 76.4 mm SL

【解説】体色はやや変異に富むが、体側に複数の暗色鞍状斑が並び、尾鰭基底に2つの暗色斑がある。背鰭が5棘で、側線有孔鱗数が38～44であることなどが特徴。オスはなわばりをもち、そのなかに1～5個体のメスを取り囲み、ハーレム型産卵をおこなうことが知られる。産卵に割り込んで放精するストリーキングオスがいるため、産卵とよく似た行動を繰り返しおこない、ストリーキングオスをだます「シグナルジャンプ」と呼ばれる行動をおこなう。沿岸の浅い砂礫域や砂泥域にごく普通にみられるが、30 m以深のやや深い場所にも生息する。千葉県以南の太平洋沿岸と島根県隠岐から九州北岸の日本海沿岸、屋久島、慶良間諸島に分布する。(小枝圭太)



ワニギス属 *Champsodon snyderi* Franz, 1910**ワニギス** 珍しさ ★★■ ワニギス *Champsodon snyderi* KAUM-I. 69105, 71.4 mm SL■ ワニギス *Champsodon snyderi* KAUM-I. 68429, 52.4 mm SL

【解説】体はやや側扁し、腹部には鱗がない。甲殻類や魚類をおもな餌とし、共食いを多くおこなうことが知られている。昼間は海底付近に多く、夜間になると海面付近へ浮上する日周鉛直運動をおこなうことが知られている（Morohashi and Sasaki, 2003）。鹿児島湾や志布志湾などにおいては底曳網によって大量に漁獲される。内之浦湾においては、底曳網漁業は展開されていないものの、定置網によって体長数 cm の小型個体が漁獲されている。これは夜間に浮上した個体が入網したものと思われる。食用とされることはなく、利用は養殖餌料になるにとどまる。（畑 晴陵）

■ ワニギス *Champsodon snyderi* KAUM-I. 29079, 46.0 mm SL

ミシマオコゼ属 *Uranoscopus bicinctus* Temminck & Schlegel, 1843

**メガネウオ** 珍しさ ★★★★★



■ メガネウオ *Uranoscopus bicinctus* KAUM-I. 94397, 223.1 mm SL

【解説】体は茶褐色を呈し、体の前半部と後半部に1つずつ、焦げ茶色の鞍状斑を有する。背鰭は2基。各体側鱗は斜め後下方に向かって整然と並ぶ。口内に細長い肉質突起を有しており、これをゴカイの様に動かして餌となる小魚を誘引するものと思われる。内之浦湾においては最も多く漁獲されるミシマオコゼ類である。ミシマオコゼ科魚類は日本国内において利用されることは多くない。しかし、近年では日本各地で本科魚類の有効利用が試みられており（日本経済新聞、2010b）、鹿児島県においてもスーパーマーケットなどに鍋物用などとして切り身が並ぶことが増えてきている。（畑 晴陵）



■ ゴカイのようなメガネウオの肉質突起 (KAUM-I. 94397)



ミシマオコゼ属 *Uranoscopus chinensis* Guichenot, 1882**キビレミシマ** 珍しさ ★★★★★■ キビレミシマ *Uranoscopus chinensis* KAUM-I. 67756, 187.3 mm SL■ キビレミシマ *Uranoscopus chinensis* KAUM-I. 71453, 153.9 mm SL

【解説】背鰭を2基そなえ、体背面は茶褐色を呈し、虫食い状の白色斑があり、ミシマオコゼに類似するが、前鰓蓋骨下縁に4本の棘をそなえること（ミシマオコゼでは3本）、両眼間隔域にあるくぼみが後方に伸長し、両眼の後縁を結んだ線に達すること（達しない）で識別される。また、キビレミシマの胸鰭は鮮やかな黄色を呈する。日本国内においては千葉県から九州南岸にかけての太平洋沿岸、青森県から九州西岸にかけての日本海・東シナ海から報告されており、小笠原諸島と琉球列島には分布しないものと思われる。東アジア固有種であり、日本のほか、朝鮮半島南岸、台湾、および黄海南部から南シナ海沿岸にかけての中国沿岸から知られている。（畑 晴陵）



■ キビレミシマの頭部背面（KAUM-I. 71453）

ミシマオコゼ属 *Uranoscopus japonicus* Houttuyn, 1782

**ミシマオコゼ** 珍しさ ★★★★★



■ ミシマオコゼ *Uranoscopus japonicus* KAUM-I. 40443, 215.0 mm SL

【解説】背鰭が2基あること、体背面に虫食い状の白色斑があること、前鰓蓋骨下縁に3本の棘をそなえることにより、日本産同科他種と識別される。北西太平洋固有種であり、日本のほか、朝鮮半島南岸・西岸、中国の東シナ海沿岸、および台湾から報告されている。日本国内においては北海道から九州南岸にかけての太平洋沿岸、青森県から九州南岸にかけての日本海・東シナ海沿岸、瀬戸内海に広く分布するが、小笠原諸島においては稀であり、また琉球列島における記録はない。メガネウオ以外のミシマオコゼ類に共通するが、内之浦湾における漁獲は少ない。ミシマオコゼ科魚類は、眼が頭部背側についており、海底で常に上をみていることから英名で「スターゲイザー」（星をみる者・天文学者を意味する）と呼ばれる。（畑 晴陵）



■ ミシマオコゼの眼は頭部背側にある（KAUM-I. 40443, 215.0 mm SL）



■ 冷凍前のミシマオコゼ *Uranoscopus japonicus* (KAUM-I. 40443, 215.0 mm SL)



イソギンポ属 *Parablennius yatabei* (Jordan & Snyder, 1900)**イソギンポ** 珍しさ ★★★■ イソギンポ *Parablennius yatabei* KAUM-I. 97488, 56.6 mm SL■ イソギンポ *Parablennius yatabei* KAUM-I. 68817, 30.4 mm SL

【解説】イソギンポ科は細長い体をもち、唇が厚く、眼の上や頭部に皮弁をもつ種が多い。本種は尾鰭軟条の大部分が分枝し、上顎に犬歯状歯があることが特徴。温帯に適応した種であり、国内では北海道から九州までの日本海・東シナ海・太平洋沿岸、瀬戸内海、奄美大島に広く分布する。内之浦湾内には数多く生息するものと考えられるが、定置網に入ることは少ない。イソギンポ科魚類は総じて小さく、食用にされることはない。(小枝圭太)

■ イソギンポ *Parablennius yatabei* KAUM-I. 98167, 45.2 mm SL



ハタタテギンポ属 *Petroscirtes breviceps* (Valenciennes, 1836)

**ニジギンポ** 珍しさ ★★



■ ニジギンポ *Petroscirtes breviceps* KAUM-I. 62439, 59.7 mm SL



■ ニジギンポ *Petroscirtes breviceps* KAUM-I. 68428, 37.0 mm SL

【解説】鰓蓋や尾鰭基底に暗色斑がなく、下顎の皮弁が分枝しない、頭後部に皮弁がないことなどが特徴。岩礁性で内湾の藻場に生息する普通種。ホンダワラやアマモなどの海藻や海草に付くが、ロープやブイなどの人工物に大小 10 個体ほどが付いていることをみかけることが多い。ロープの上をチョコチョコと泳ぎ回り、これらから離れることはほとんどない。産卵はカキ殻や岩穴、空き缶などを利用する。インド・西太平洋の熱帯・温帯域に広く分布しており、国内では北海道から沖縄までほぼ全域に分布している。内之浦湾でも定置網のロープに付いている姿がよく普通にみられるが、網にはいることは多くない。(小枝圭太)



■ ニジギンポの頭部 (KAUM-I. 62439, 59.7 mm SL)



ウナギギンポ属 *Xiphasia setifer* Swainson, 1839**ウナギギンポ**

珍しさ ★★★★★

■ ウナギギンポ *Xiphasia setifer* KAUM-I. 71455, 592.3 mm SL

■ ウナギギンポの頭部 (KAUM-I. 71455, 592.3 mm SL)

【解説】名の通りウナギのように体が細長く、一見するとイソギンポ科とは思えないほどだが、顔立ちはたしかにイソギンポ科のそれである。背鰭起部は眼の中央より前にあり、基底の非常に長い背鰭が尾部まで続く。体は全体に黄緑色で褐色の横帯が背鰭から臀鰭まで横断するように数多くはしる。本種とよく似たヒメウナギギンポ（本著未掲載）とは、胸鰭軟状、背鰭棘および軟条、臀鰭軟条が多いことで識別される。内湾や浅海の水深約 30 ~ 50 m の砂泥底に生息し、驚くと砂泥中に潜る。北海道から九州南岸の太平洋沿岸まで散発的に記録されており、島根県敬川沖、石垣島などからも記録がある。内之浦漁港では 3 個体が得られており、稀種である。（小枝圭太）

■ ウナギギンポ *Xiphasia setifer* KAUM-I. 107724, 262.2 mm SL

■ ウナギギンポの頭部 (KAUM-I. 107724, 262.2 mm SL)

ヨメゴチ属 *Calliurichthys japonicus* (Houttuyn, 1782)

**ヨメゴチ** 珍しさ ★★★★★



■ ヨメゴチ *Calliurichthys japonicus* KAUM-I. 98147, 63.0 mm SL, メス

【解説】ネズツポ科は体が細長く、縦扁する。オスがメスより大きな背鰭もち、鮮やかな色彩である種が多い。底生性で、背鰭を立てて砂地を滑るように泳ぐ。ネズツポ科というグループだが、「ネズツポ」という和名をもつ種はおらず、「ヌメリ」や「テグリ」などがつく種が多い。

ヨメゴチは後頭部に1対の骨質隆起がある、前鰓蓋骨棘が槍状で長く、内側が鋸歯状である、第1背鰭の第3棘と第4棘の間に黒色斑があることが特徴。水深20～200mの砂泥底に生息する。日本と朝鮮半島、済州島、台湾、中国の広東省、



■ ヨメゴチのオス(2006年5月25日撮影)

オーストラリア北西岸に分布し、国内では千葉県外房以南の太平洋沿岸、新潟県柏崎以南の日本海・東シナ海沿岸、瀬戸内海(稀)、東シナ海大陸棚から縁辺域に分布する。内之浦漁港では2個体が得られたのみで、稀である。

(小枝圭太)

ネズツポ属 *Repomucenus curvicornis* (Valenciennes, 1837)

**ネズミゴチ** 珍しさ ★★★★★



■ ネズミゴチ *Repomucenus curvicornis* KAUM-I. 71252, 63.2 mm SL, オス

【解説】雌雄ともに糸状に伸長する背鰭鰭条がなく、オスでは第1背鰭の上縁が黒く縁どられ、メスと未成熟個体では第1背鰭の後半に白く縁どられた大きな黒斑があることなどが特徴。岸近くの浅い砂底域に多く、春から夏は水深数mの浅場へ、秋から冬にはやや深みへ移動することが知られている。国内では北海道から九州の日本本土全域に広く分布する。体長は最大で17cmほどの小さな魚だが、東京や大阪などでは天ぷらなどで食される。骨までサクサクと食べることができ、美味。内湾環境の消失や汚染により漁獲量が減少しており、高級魚となりつつある。内之浦湾にも数多く分布していると思われるが、底生性であるからか定置網での採集例は少なく、また漁獲されるものも総じて小型であるため利用もされていない。(小枝圭太)

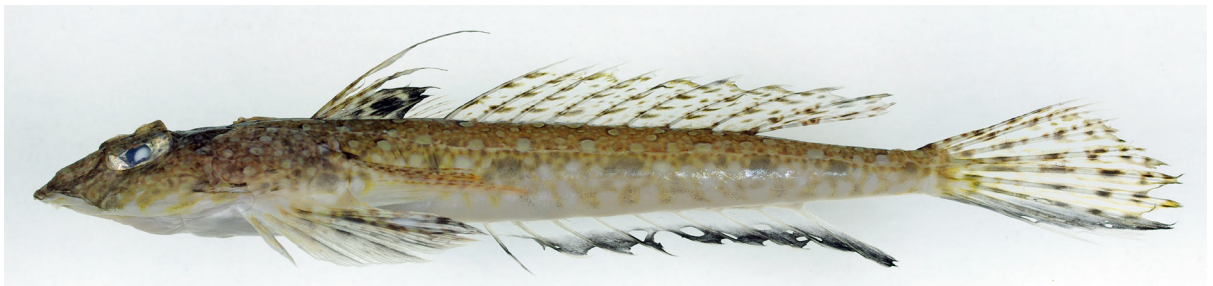


ネズップ属 *Repomucenus huguenini* (Bleeker, 1858)**ヤリヌメリ 珍しさ★★**■ ヤリヌメリ *Repomucenus huguenini* KAUM-I. 55509, 135.3 mm SL, オス

【解説】前鰓蓋骨棘が槍状で、内側が鋸歯状となることが特徴。雌雄ともに第1背鰭の棘が伸長するが、オスがより長い。ネズミゴチと同じく、海底から水面近くまで寄り添うようにして上昇する求愛行動をおこなう。求愛中に他のオスに出会うと体当たりして追い払う。産卵期は10～12月で、多くの個体が2歳での産後に死亡することが知られる。水深30～80mの砂泥域に生息し、国内では北海道から九州の日本本土沿岸全域に広く分布する。体長は最大でも16cmほどと小さいが、近年の水産種として需要のあるネズミゴチの漁獲量減少に伴い、代替品として天ぷらなどで食されるようになった。ただし、本種には身に刺激臭・辛みをもつ個体があり、こうした個体は毒性があるので食べてはいけない。（小枝圭太）



■ ヤリヌメリの背面（KAUM-I. 98015, 93.1 mm SL）

■ ヤリヌメリ *Repomucenus huguenini* KAUM-I. 59969, 79.8 mm SL, メス

ユカタハゼ属 *Hazeus otakii* Jordan & Snyder, 1901

**ユカタハゼ** 珍しさ ★★★★★

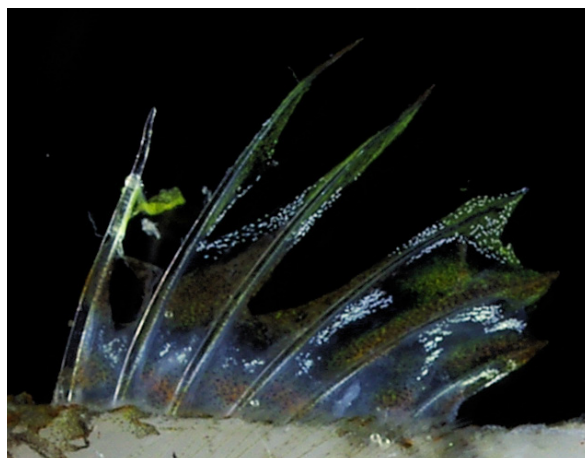


■ ユカタハゼ *Hazeus otakii* KAUM-I. 73959, 43.5 mm SL (上下は同じ個体)

【解説】 ハゼ科魚類は魚類のなかで最も多様性が高く、近年にも新種や日本初記録種が次々と報告されているグループである。内之浦湾にも様々なハゼ科魚類が数多く生息していることは想像に容易いが、本科魚類のほとんどが体長数 cm と非常に小型種であることに加え、底生性であるため、定置網によって漁獲されることは極めて少ない。

ユカタハゼは第1背鰭第1棘が他の棘より太い、前鰓蓋部に棘がない、頬と鰓蓋部に鱗があることが特徴。水深 15 ~ 30 m の内湾域の砂泥や軟泥底に生息する。国内では千葉県館山湾以南の太平洋沿岸、九州北西岸、五島列島に分布する。写真の個体は、本調査を通じて定置網によって唯一得られたハゼ科魚類である。

(小枝圭太)



■ ユカタハゼの第1背鰭第1棘は太い (KAUM-I. 73959)



ツバメウオ属 *Platax teira* (Forsskal, 1775)

**ツバメウオ**

珍しさ ★★

( 解説は次ページ )



■ ツバメウオ *Platax teira* KAUM-I. 94417, 219.7mm SL





■ 水揚げされたツバメウオ *Platex teira* の若魚（2009 年 2 月 3 日撮影）

【解説】体高が極めて高く、よく側扁する。背鰭と臀鰭をひろげると三角形に近い。体は全体に濃い灰色で、頭部後方と体側中央に太い淡灰色横帯がある。腹鰭は黄色い。幼魚は胸鰭と尾鰭を除く各鰭がさらに長い。腹鰭基部の後方に黒色斑が 1 つあることで同属他種と区別される。成魚は沿岸域の中層に生息し、数個体から多いときは 100 個体ほどの群れを作る。好奇心が強いのか、自然下でも人に慣れやすく、餌付くと人を追って泳ぎ回る。夜でも餌を探して活発に遊泳する姿がみられる。幼魚は沖合に生息するとされるが、成魚に比べて国内での目撃例は極めて少ない。インド・太平洋に広く分布し、国内では北海道から沖縄までの全域に分布している。内之浦漁港でも最大体長である 60 cm に近い成魚がたびたび入網するが、食用としては利用されない。稀に若魚も得られる。（小枝圭太）



アイゴ属 *Siganus fuscescens* (Houttuyn, 1782)**アイゴ** 珍しさ ★★■ アイゴ *Siganus fuscescens* KAUM-I. 71417, 309.3 mm SL

【解説】体は卵形でよく側扁する。背鰭の棘部と軟条部の間に欠刻があり、尾鰭がわずかに湾入する。体色はオリーブ色から茶褐色で、体側に多数の白色点があることが特徴。夜はサンゴや岩に寄り添うように眠り、色が白みがかかり、全身にまだら模様がでる。背鰭の棘には毒があり、刺されると数十分にわたりジンジンと痛むので取り扱いには注意が必要。和名であるアイゴの「アイ」は触れると肌を刺すイラクサの古称である「アイ」を語源としており、棘をもつ魚を意味すると考えられている（榮川、1982）。藻場で大きな群れをなし、そこに繁茂した藻類を食べながら泳ぎ回る。国内では北海道以外のほぼ全域に分布する。磯臭さがあるが、内臓を傷付けないように丁寧に取り出すことで、嫌な臭いはなくなり美味しく食べることができる。沖縄では塩水で似たマース煮で好まれる。刺身も美味。内之浦漁港でも普通に水揚げされるがやや小型のことが多い。また、上の写真のように、アザのような黒褐色斑が全身にでる個体がたびたびみられる。大きい個体は市場に並ぶが、小型のものは多くの場合、投棄されている。鹿児島県本土では本種は「バリ」と呼ばれることが多い。（小枝圭太）



■ アイゴ（2005年1月12日撮影）



■ 水揚げされた大型のアイゴ（2007年6月7日撮影）



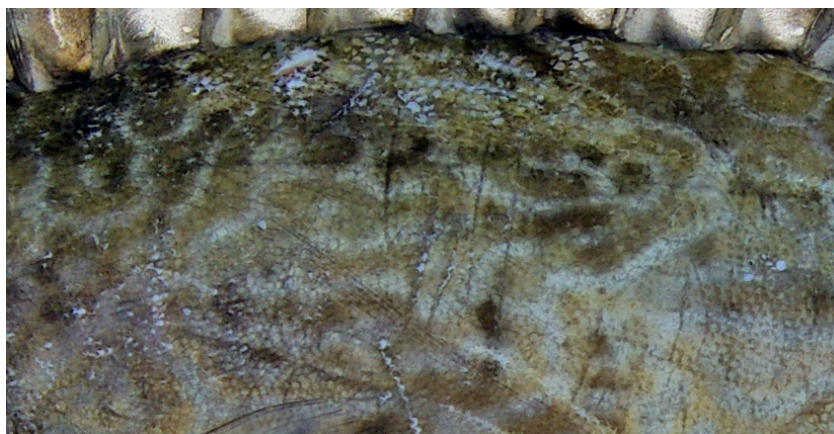
アイゴ属 *Siganus spinus* (Linnaeus, 1758)

**アミアイゴ** 珍しさ ★★★★★



■ アミアイゴ *Siganus spinus* KAUM-I. 6483, 113.2 mm SL

【解説】アイゴに似るが、体側全体に虫食い模様があることで識別される。アミアイゴの幼魚は春先に大群で接岸し、プランクトン食から藻類食へと移行する。その際は、海岸からみても海の色が黒っぽく見えるほど大量の魚影で海が埋め尽くされる。藻類食に移行する前は臭みがなく美味であるため、沖縄ではこれらを「スク」と呼び、塩漬け（スクガラス）にするために大量に漁獲される。アイゴと同様に背鰭棘に毒があるので、取り扱いには注意が必要。国内では、静岡県以南の太平洋沿岸にも分布するが、琉球列島で多い。内之浦漁港では非常に稀で、写真の小型個体（KAUM-I. 6483）が採集されたのみ。（小枝圭太）



■ アミアイゴの体側には虫食い模様はいる（KAUM-I. 6483）



■ ツノダシの幼魚 *Zancus cornutus*  
(KAUM-I. 94381, 57.0 mm SL; 解説は次のページ)



ツノダシ属 *Zanclus cornutus* (Linnaeus, 1758)

ツノダシ 珍しさ ★★★★★

■ ツノダシ *Zanclus cornutus* KAUM-I. 38853, 136.0 mm SL

【解説】ツノダシ科は1属1種のみから構成され、インド・太平洋の温帯から熱帯域まで非常に広く分布する。体高は著しく高く、強く側扁する。背鰭第3棘が著しく長く伸長し、吻は突出する。歯はブラシ状。体は白色で、黒色と黄色の横帯が交互にはしる。岩礁・サンゴ礁域で普通にみられ、水深180 mからも採集された例がある。日中は数個体、時に数百個体の大群で海底をつついてはいるが、夜になるとサンゴや岩に寄り添うように眠り、色が黒っぽくなる（小枝、2017d）。体長6 cmほどまで着底せず、着底直後は体が半透明。体長25 cmほどまで成長するが、内之浦漁港からは体長15 cmに満たない小型個体と半透明の幼魚が1個体ずつ得られている。（小枝圭太）

クロハギ属 *Acanthurus dussumieri* Valenciennes, 1835

# ニセカンランハギ

珍しさ ★★★★★



■ ニセカンランハギ *Acanthurus dussumieri* KAUM-I. 65986, 193.8 mm SL

【解説】ニザダイ科は体がよく側扁し、口が小さい。色彩が多様で、色鮮やかな種も多い。本種はクロハギ、オスジクロハギ（いずれも本著未掲載）に似るが、尾柄棘を覆う被膜が白色である、背鰭は黄色で顕著な縞模様がない、尾鰭後半に多数の暗色斑点があることなどで識別できる。サンゴ礁・岩礁域に生息し、単独か数個体の群れでみられる。胸鰭を羽ばたかせながら泳ぎ、尾鰭を使うことはあまりない。夜は岩などに寄り添うようにして眠っている。茨城県以南の太平洋沿岸、新潟県以南の日本海沿岸でもみられるが、琉球列島や小笠原諸島などで多い。沖縄県では「トカジャー」と呼ばれて電灯潜り（潜水漁）により漁獲され、マース煮（塩煮）や唐揚げなどで食べられるが、独特の臭いがあるため値は安い。（小枝圭太）



■ ニセカンランハギ  
KAUM-I. 6489, 179.1 mm SL



クロハギ属 *Acanthurus mata* (Cuvier, 1829)**ヒラニザ**

珍しさ ★★★★★

■ ヒラニザ *Acanthurus mata* KAUM-I. 6484, 96.7 mm SL

【解説】同属他種と比較して、やや体高が低く、吻が短い。体と頭部には多数の青色縦帯がはしる。サンゴ礁域の浅場や外縁周辺で単独か数個体の小群でみられる。ニセカンランハギやクロハギ（本書未掲載）に似るが、これらと混群でみられることはあまりない。千葉県館山湾～高知県柏島の太平洋沿岸にも分布するが数は少なく、琉球列島や小笠原諸島で多い。内之浦漁港から得られた写真の標本は、財団法人鹿児島市水族館公社（2008）により報告されており、これは九州沿岸からの初めての記録である。奄美・沖縄地域では釣りや追い込み漁、刺網などで漁獲される。ニセカンランハギとよく似ているが、ヒラニザはニザダイ科のなかでもっとも味が良いといわれるほど美味である。刺身でも美味しく、煮付にもあう。似た環境に生息する同属他種でこれほど食味の評価に差があるのは、食性など両種の生態に何かしら大きな違いがあることが、その理由として考えられる。（小枝圭太）

■ 冷凍前のヒラニザ  
(KAUM-I. 6484, 96.7 mm SL)

クロハギ属 *Acanthurus nigrofuscus* (Forsskal, 1775)

**ナガニザ** 珍しさ ★★★★★



■ ナガニザ *Acanthurus nigrofuscus* KAUM-I. 98149, 90.8 mm SL

【解説】赤紫色から茶色の体で、背鰭と臀鰭の基底後端に淡い黒色斑があることが特徴。頭部と胸部には橙色斑点が散在するが、不明瞭な個体もある。サンゴ礁の斜面や波打ち際のごく浅い場所に生息する。本種のみによる数個体の群れもみられるが、他のニザダイ科やブダイ科、ベラ科魚類などと混群を形成する姿もよくみられる。神奈川県三浦半島～高知県柏島の太平洋沿岸にも分布するが数は少なく、琉球列島や小笠原諸島で多い。内之浦漁港から得られた写真の標本（KAUM-I. 6488）は、財団法人鹿児島市水族館公社（2008）により報告されており、これは九州沿岸からの初めての記録であった。本種は最大でも体長 18 cm 程度とニザダイ科魚類としては比較的小型であり、食用とされることは少ない。（小枝圭太）



■ ナガニザ KAUM-I. 6488, 117.5 mm SL



テングハギ属 *Naso lituratus* (Forster, 1801)

## ミヤコテングハギ

珍しさ ★★★★★

■ ミヤコテングハギ *Naso lituratus* KAUM-I. 19876, 64.0 mm SL

【解説】テングハギ属には、テングハギのように名の通り前頭部に角状突起をもつ種がいるが、本種には角がない。体は黒色～墨色で、唇や背鰭、臀鰭、尾柄棘が黄色く、一見して忘れられない色彩の魚である。尾柄の骨質板は個体によっては非常に鋭く、切れ味がよい（筆者はこれで手を切り、4針縫ったことがある）、とりわけ生体の取り扱いには注意が必要。サンゴ礁域に単独か数個体、あるいはモンツキハギ（本書未掲載）やテングハギ、キンチャクダイ類、ブダイ類などの混群でみられる。これまで国内において本種の稚魚に関する知見はなく、形態の詳細は不明である。内之浦湾で得られた標本は、色彩の特徴が成魚のそれとは大きく異なったものの、鰭条の数などが日本産テングハギ属のなかで唯一ミヤコテングハギに一致したため、本種に同定された。ミヤコテングハギはインド・太平洋に広く分布し、国内では琉球列島や小笠原諸島で多い。南日本沿岸域では、これまで神奈川県横須賀、伊豆半島西岸、和歌山県白浜・串本、高知県柏島などの太平洋沿岸、瀬戸内海から記録されていたが数は少ない。本報告により内之浦漁港から得られた写真の1標本は、九州沿岸からの初めての記録である。沖縄県では市場に並ぶこともあるが、積極的に漁獲される種ではない。（小枝圭太）



■ ミヤコテングハギの頭部（KAUM-I. 19876）

テングハギ属 *Naso unicornis* (Forsskal, 1775)

**テングハギ** 珍しさ ★★★★★



■ テングハギ *Naso unicornis* KAUM-I. 30190, 375.2 mm SL

【解説】前頭部の吻から離れた位置に角状突起があることが特徴。体はオリーブ色で、大型個体では体側にあざのような濃緑色斑をもつものもある。小型個体は角状突起が小さく、幼魚はもたない。尾柄の骨質板は個体によっては鋭いため（特にオスは鋭い）、生体の取り扱いには注意が必要。岩礁・サンゴ礁域に単独か数個体、あるいは同じような大きさの他の魚種との混群でみられる。テングハギ属のなかでは北方に分布する種であり、青森県下北半島以南の太平洋・日本海・東シナ海沿岸にも分布する。ただし、これらの場所での個体数は少なく、琉球列島や小笠原諸島に多い。沖縄県では「ちぬまん」と呼ばれ食用となる。個体により脂ののりに差があり、脂の多い個体は刺身で美味。内臓は臭いが、肝を入れた「ちぬまん汁」をあえて好む人もいる（臭いが強く苦手な人が多い）。（小枝圭太）

テングハギ属 *Naso* sp.

**テングハギ属の一種** 珍しさ ★★★★★

【解説】ニザダイ科魚類の幼魚は特徴が少なく、同定が困難である。内之浦漁港で採集された個体は体に黒色斑点が散在することや、体側後部と尾柄部に黒色横帯があるなどの特徴がみられたものの、種の特定は困難であった。ただし、鰭条数などの特徴からほかに内之浦から記録のあるテングハギ属であるミヤコテングハギとテングハギとは異なる種であることが分かる。

（小枝圭太）



■ テングハギ属の一種 *Naso* sp.  
KAUM-I. 63204, 31.4 mm SL



ニザダイ属 *Prionurus scalprum* Valenciennes, 1835**ニザダイ** 珍しさ ★■ ニザダイ *Prionurus scalprum* KAUM-I. 96817, 341.0 mm SL

【解説】体は灰色。尾柄部に3～5個の不可動な骨質板があり、この板上に黒斑が並ぶ。尾柄の骨質板はテングハギ属ほどには鋭く尖らないものの、扱いには注意が必要。磯場を代表する魚で、南日本沿岸で多いが、琉球列島でも岩礁域や消波ブロックの周辺で見られる普通種。数個体による群れをつくる。おもに石灰藻類を餌とする。国内では、北海道以外のほぼ全域に分布している。尾柄部の黒斑のうち3つが特に明瞭であることから、釣り人などからは「さんのじ」と呼ばれることが多い。内之浦漁港では「こめ」と呼ばれる。食用にはされているものの、やや磯臭さが強いいため、安価に取引されている。ただし口永良部島など地域によっては磯臭さがいないため、刺身だけでなく、胃袋や生殖腺さえも美味という（小山内、2017）。（小枝圭太）

■ 市場に並びニザダイ *Prionurus scalprum* (2013年10月10日撮影)



シロカジキ属 *Istiompax indica* (Cuvier, 1832)

**シロカジキ** 珍しさ ★★★★★



■ 水揚げされたシロカジキ *Istiompax indica* (2009年11月24日撮影)

【解説】生時、体背部の黒みが強いいため、英名は「ブラックマーリン」。和名は、死後に体色が淡くなり、白みを帯びることに由来するものと思われる。体背縁は著しく隆起する。胸鰭が関節により固定されており、動かすことが出来ない。全長約4.5 m、体重700 kgに達する(Nakamura, 1983, 2001)。生態に関しては不明な点が多いが、北西太平洋においては、中国海南島の近海で5～6月に産卵するものと考えられている(Nakamura, 1941, 1942)。マカジキ類としてはバショウカジキに次いで沿岸性が強い。内之浦には定置網に吻が刺さったまま死亡した個体の頭部骨格標本が残されている。(畑 晴陵)





■ シロカジキ *Istiompax indica* の頭部骨格（2015 年 12 月 9 日撮影）

バショウカジキ属 *Istiophorus platypterus* (Shaw, 1792)

**バショウカジキ** 珍しさ ★★



■ 水揚げされたバショウカジキ *Istiophorus platypterus*（2007 年 11 月 8 日撮影）

【解説】芭蕉の葉のような大きい第 1 背鰭が特徴。鹿児島県内においては秋季に定置網や流し刺網により多獲され、「秋太郎」と称される。産卵は夏季に台湾近海でおこなわれ、オスは通年台湾周辺にとどまり、日本近海まで回遊する個体はほぼメスと考えられている（奥原、2004）。内之浦湾においても、1 m 以上の個体が秋季には頻繁に水揚げされる。鹿児島県内では刺身などにして盛んに消費されるが、県外では積極的に食用に供されることは少なく、県内独特の食文化であるといえる。（畑 晴陵）



カマス属 *Sphyraena barracuda* (Edwards, 1771)

**オニカマス** 珍しさ ★★★★★



■ 水揚げされたオニカマス *Sphyraena arabiansis* (2012年7月31日撮影)

【解説】体に横帯が多数はいり、尾鰭は黒色を呈し、両葉の後端は白色。両顎には鋭い犬歯状歯を多数そなえる。幼魚は河川の河口やマングローブ域、藻場などに多く出現する。幼魚の体はオリーブ色や茶色を呈し、茶褐色の黒色斑が並ぶ。この色彩はヒルギ類の種子などの植物片に擬態するものと考えられている（瀬能、2014）。稀にはあるが、日本国内における本種のシガテラ中毒が報告されており（野口、2004）、厚生労働省により、注意喚起がなされている（厚生省、1953）。内之浦湾では極めて稀に漁獲されるものの、利用されない。（畑 晴陵）

カマス属 *Sphyraena forsteri* Cuvier, 1829

**オオメカマス** 珍しさ ★★★★★



■ オオメカマス *Sphyraena forsteri* KAUM-I. 300054, 424.0 mm SL

【解説】体は円筒形で、体側上部は青みがかり、体腹面にかけては銀白色。胸鰭腋部後方に黒色斑がある。第1鰓弓にはコブ状の鰓耙が多数並び、それぞれの鰓耙の上に小棘が複数ある。他の日本産カマス科魚類において、鰓耙は細長いものが1～2本あるか、または鰓耙が全くないことから、本種の識別は容易である。日本における記録は少なく、鹿児島県においてはこれまで薩摩半島西岸に位置する野間池と屋久島からのみ記録されていた。本報告は本種の九州太平洋沿岸における初めての記録である。内之浦湾においても極めて稀な魚であり、写真の個体が確認されたのみ。（畑 晴陵）



■ オオメカマスの頭部  
(KAUM-I. 300054)



カマス属 *Sphyraena iburiensis* Doiuchi & Nakabo, 2005**イブリカマス** 珍しさ ★★★■ イブリカマス *Sphyraena iburiensis* KAUM-I. 98040, 195.7 mm SL

【解説】体は円筒形。体背面から体側上部にかけては青みがかった緑色。体側に2本の茶褐色縦帯がはいる。土居内（2001）によりタイワンカマスに類似した未記載種として報告され、高知県以布利から得られた個体に基づき、和名イブリカマスが提唱された。その後、Doiuchi and Nakabo (2005) により新種記載され、日本国内ではこれまでに以布利のほか、静岡県伊東市川奈、和歌山県串本、白浜、愛媛県愛南町深浦、鹿児島県本土、種子島、奄美大島、竹富島、および八丈島から記録されており、国外においてはエジプトの紅海沿岸からのみ報告されている（池田・中坊、2015；鎗木、2016；Hata et al., 2017）。以布利においてはタイワンカマスに交じって頻繁に漁獲されるが（土居内、2001）、内之浦湾ではタイワンカマスは数多く漁獲されるものの、イブリカマスは稀。タイワンカマスと区別されずに消費される。（畑 晴陵）

カマス属 *Sphyraena japonica* Bloch & Schneider, 1801**ヤマトカマス** 珍しさ ★■ ヤマトカマス *Sphyraena japonica* KAUM-I. 94372, 245.2 mm SL

【解説】体は円筒形。腹鰭起部は背鰭起部よりもわずかに後方に位置する。側線よりも下方に不明瞭な1縦帯がはいる。稚魚期から餌生物のほとんどを魚に依存する（伊東、2009）。日本、朝鮮半島、中国、および台湾からのみ記録されている東アジア固有種。日本国内では北海道から九州南岸にかけての日本海・太平洋沿岸に分布し、大隅諸島を除く琉球列島からは記録されていない。季節的な消長はあるものの、内之浦湾においてはアカカマスに次いで多く漁獲されるカマス科魚類であり、食用に供される。また、他のカマス類と異なり、小型個体も定置網に多く入る。干物に加工されることが多い。（畑 晴陵）

■ 大量に水揚げされたヤマトカマス  
(2010年10月6日撮影)

カマス属 *Sphyraena obtusata* Cuvier, 1829

## タイワンカマス 珍しさ ★★



■ タイワンカマス *Sphyraena obtusata* KAUM-I. 98939, 339.1 mm SL



■ タイワンカマス *Sphyraena obtusata* KAUM-I. 98938, 317.9 mm SL

【解説】体背面は茶色がかった深緑色。体側に不明瞭な2本の黄褐色の縦帯がはいり、上方のものは側線上に、下方のものは側線に並行し、尾鰭基底中央に達する。同属のイブリカマスは本種に酷似するが、体側縦帯の下方のものが、尾鰭基底中央よりも下に達することによりタイワンカマスと識別される（Doiuchi and Nakabo, 2005）。インド・西太平洋に広く分布し、黒海や地中海への移入も確認されている。日本国内においては相模湾以南の太平洋沿岸に分布し、沖縄県で定置網により得られるカマス科魚類のほとんどは本種であるが（本永、1991）、内之浦湾における漁獲量はアカカマス、ヤマトカマスに次ぐ程度と思われる。食味はよく、刺身のほか、焼き物や干物などにして美味である。（畑 晴陵）



■ 水揚げされたアカカマス *Sphyraena pinguis* (2017年1月11日撮影)



カマス属 *Sphyraena pinguis* Günther, 1874**アカカマス** 珍しさ ★■ アカカマス *Sphyraena pinguis* KAUM-I. 19873, 282.2 mm SL

【解説】体背面は茶色。主鰓蓋骨後縁は尖り、体側に胸鰭基底上端を通る1本の暗色縦帯がはいる。従来、北西太平洋に固有の種と考えられてきたが、これまで別種とされてきたダルマカマスがアカカマスと同種とみなされ、インド・西太平洋に広く分布することが明らかとなっている（Doiuchi and Nakabo, 2005）。鹿児島湾における研究では、産卵期は5～8月、幼期の成長は極めて速く、発生後約半年で尾叉長25 cmにまで成長し、最高齢は9歳魚が確認されている（増田ほか、2003）。内之浦湾において最も多く漁獲されるカマス類である。（畑 晴陵）

■ アカカマス  
KAUM-I. 94337, 213.7 mm SLカマス属 *Sphyraena putnamae* Jordan & Seale, 1905**オオカマス** 珍しさ ★★★★★■ オオカマス *Sphyraena putnamae* KAUM-I. 94393, 344.0 mm SL

【解説】体背面は緑がかった暗色を呈し、体側面は銀白色。体には多数のくの字型の横帯がはいる。第2背鰭と臀鰭の最後軟条はわずかに伸長する。最大で全長87 cmに達する大型種。夜行性であるとされ、昼間は大きな群れで遊泳することが知られる（Senou, 2001）。インド・西太平洋に広く分布し、東南アジアでは大型個体が大量に水揚げされるが、日本においては少なく、これまで相模湾、和歌山県、土佐湾、喜界島、奄美大島、瀬底島、および沖縄島から記録されている。本報告はオオカマスの九州沿岸における標本に基づく初めての記録である。内之浦湾においても稀な種であり、本調査を通じて写真の個体を含めた2例が確認されたのみ。（畑 晴陵）

カマス属 *Sphyraena* sp.

## カマス属の一種

珍しさ ★★★★★



■ カマス属の一種 *Sphyraena* sp. KAUM-I. 52534, 583.2 mm SL

【解説】体は銀白色を呈し、体背面は緑がかった茶褐色。背鰭の最後軟条が伸長しない。尾鰭は湾入型で、大部分は黄色がかかる。体側面には多数の暗緑色の「くの字」状横帯がある。鰓耙はない。これらの特徴が Senou (2001) によって示された *Sphyraena jello* (日本における正式な記録がない) に似るが精査が必要。本種の国内からの報告については、三木涼平氏 (宮崎大学大学院) ほかにより近く発表される予定である。内之浦湾における調査では写真の1個体 (KAUM-I. 52534) のみを得られた。(畑 晴陵)



■ 冷凍前のカマス属の一種 *Sphyraena* sp. KAUM-I. 52534, 583.2 mm SL



■ カマス属の一種 *Sphyraena* sp. の頭部 (KAUM-I. 52534, 583.2 mm SL)



ナガユメタチモドキ属 *Assurger anzac* (Alexander, 1917)**ナガユメタチモドキ** 珍しさ ★★★★★■ ナガユメタチモドキ *Assurger anzac* KAUM-I. 98082, 966.0 mm SL

■ ナガユメタチモドキの頭部 (KAUM-I. 98082, 966.0 mm SL)



■ ナガユメタチモドキの尾部 (KAUM-I. 98082, 966.0 mm SL)

【解説】タチウオ科の体はリボン状で、著しく長いが、本種はそのなかでも特に長い。尾鰭があること、両眼間隔に隆起縁があり、眼が前部背縁に接近しないことが特徴。背鰭鰭条数（棘＋軟条）は 116 ～ 123。底層遊泳性で、通常は 150 ～ 400 m に生息するため、内之浦湾のような浅い場所に出現することは極めて稀であるといえる。幼魚は表層から中層遊泳性といわれており、写真の個体は湾内に迷入したものと考えられる。世界中の温帯域に分布し、国内では青森県津軽海峡沿岸、岩手県岩泉、相模湾、静岡県石廊崎、熊野灘、紀伊水道、土佐湾、山口県日本海沿岸から記録がある。本種の記録の多くは体長 2 m 近い大型個体であり、体長 1 m ほどの本標本は稀少である。タチウオ科は漁獲量が多く、味も良いため水産的な価値が高いものが多いものの、本種を含む尾鰭をもつタチウオの仲間は総じて稀種であるため、食用となることは稀であろう。（小枝圭太）

タチウオ属 *Trichiurus japonicus* Temminck & Schlegel, 1844

# タチウオ 珍しさ ★



■ タチウオ *Trichiurus japonicus* KAUM-I. 94387, 585.0 mm SL



■ タチウオの頭部 (KAUM-I. 94387, 585.0 mm SL)

【解説】タチウオ属魚類は世界中で利用され、水産重要種を多く含む。本種の体は著しく長く、リボン状。生時、全身は銀白色で光を反射する。背鰭は白色。尾鰭はない。上顎には強大な犬歯状歯があり、口床は暗色。最大で 1.5 m にもなるが、多くは 1 m 程度。大陸棚域に生息し、沿岸でもみられる。群れをつくり、基本的に立ち泳ぎをしている。和名の「タチ」はこの立ち泳ぎに由来する説もあるが、本種の細長く銀白色の体が太刀に似るためとする説が通説である。昼夜で表層から深場まで鉛直運動をくりかえす。魚食性が強く、鋭い歯で噛みつき、時には獲物を切断する。国内では北海道から九州南岸の日本海・東シナ海・太平洋沿岸に分布するが、琉球列島や小笠原諸島には分布しない。内之浦漁港では一年中まとまった数が漁獲され、春先には 40 cm 以下の小型個体も大量に入網する。

本種の体表はグアニン色素に被われており、過去にはこれを模造真珠の光彩に用いていた（榮川、1982）。その銀色に輝く体表の状態によって値段が上下することから、漁獲後の丁寧な取り扱いが求められている。美味しい魚で、刺身、焼き、ムニエルなどで食される。（小枝圭太）



■ 水揚げされたタチウオ  
(2017 年 1 月 11 日撮影)



タチウオ属 *Trichiurus* sp.**テンジクタチ**

珍しさ ★★

■ テンジクタチ *Trichiurus* sp. KAUM-I. 69075, 965.0 mm SL

■ テンジクタチの頭部 (KAUM-I. 69075, 965.0 mm SL)

【解説】タチウオに似るが、背鰭が黄色いことおよび口床が淡色であることで容易に識別される。タチウオより大型になり、大きいものは 1.5 m を越えるものがある。タチウオ科魚類には分類学的混乱が著しいため、世界中で多く漁獲されている重要なグループであるにもかかわらず、未だ学名が定まっていない種が複数いる。本種もそのうちの 1 種。国内には本種の他に、オキナワオオタチ（本著未掲載）と呼ばれる全長 2 m 近くにまで成長する大型種も分布する。テンジクタチは琉球列島では沖合よりも沿岸域に多く、釣りの対象種でもある。タチウオと同じく、魚食性が強い。国内では和歌山県以南の太平洋沿岸や琉球列島に分布し、沖縄島では水揚げが多い。内之浦漁港では近年、漁獲量が増えている熱帯種の代表であり、タチウオほどではないものの、一年を通して一定量の水揚げがある。4 kg にもなる大型個体が漁獲された例もあるという。タチウオよりも美味とされる。刺身でも美味だが、きめ細かくジューシーな身は塩焼きや蒸し料理にもよく合う。ぶつ切りにして焼いたものをご飯と一緒に炊きこんだ「タチウオ飯」は、本種のふわりとした食感に良くあい非常に美味。（小枝圭太）



■ 水揚げされたタチウオとテンジクタチ。テンジクタチは大型のものが多い（2015 年 6 月 12 日撮影）



カマスサワラ属 *Acanthocybium solandri* (Cuvier, 1832)

## カマスサワラ 珍しさ ★★



■ 水揚げされたカマスサワラ *Acanthocybium solandri* (2006年10月26日撮影)

【解説】体は円筒形を呈し、多数の黒色横帯がはいる。極めて遊泳力が強く、最大遊泳速度は77.05 kmの記録がある (Walters and Fiersteine, 1964)。カマスサワラ属の現世種は世界で本種のみが知られるが (Collette and Nauen, 1983)、岐阜県瑞浪市の瑞浪層群や岡山県新見市の備北層群から本属魚類のものと思われる化石が得られている (大江ほか, 1981; 松島, 2016)。世界中の熱帯・温帯域に分布し、日本国内においては青森県以南に広く分布する。最大尾叉長210 cm、体重83 kgに達する大型種 (Collette and Nauen, 1983; Collette, 2001)。内之浦湾においては定置網などにより多く漁獲され、全長1 m以上の大型個体も珍しくない。「沖さら」や「沖ざーら」と称される。刺身や焼き魚にして非常に美味しい魚である。(畑 晴陵)



■ 水揚げされたカマスサワラ (2004年9月15日撮影)



ソウダガツオ属 *Auxis rochei rochei* (Risso, 1810)**マルソウダ** 珍しさ ★■ マルソウダ *Auxis rochei rochei* KAUM-I. 77493, 288.0 mm SL

【解説】体は紡錘形で、体高は低い。体側上部は青色。体側中部から体腹面にかけては一様に銀白色。鰓蓋上部の黒色斑は、体背面の黒色域と連続する。東太平洋を除く全世界の暖海域に広く分布する。体長 55 cm 程度に成長する。内之浦では定置網で頻繁に漁獲され、その量はヒラソウダよりも多い。身は血合筋が多く、傷みやすく、また生臭が強いいため、市場価値はヒラソウダよりも低い。宗田節の原料となる。(畑 晴陵)

ソウダガツオ属 *Auxis thazard* (Lacepède, 1800)**ヒラソウダ** 珍しさ ★■ ヒラソウダ *Auxis thazard* KAUM-I. 82760, 221.2 mm SL

【解説】体は紡錘形で、やや側扁する。体背面は黒く、体側上部は青色。体側中部から体腹面にかけては一様に銀白色。鰓蓋上部に黒色斑がある。東太平洋を除く全世界の暖海域に広く分布する。体長 60 cm 程度に成長する。内之浦湾では定置網で頻繁に漁獲される。マルソウダと比較して血合筋が少ないため、傷みにくく、また味も良いとされる。刺身などにして食される。(畑 晴陵)



■ ヒラソウダ *Auxis thazard* KAUM-I. 77494, 245.0 mm SL

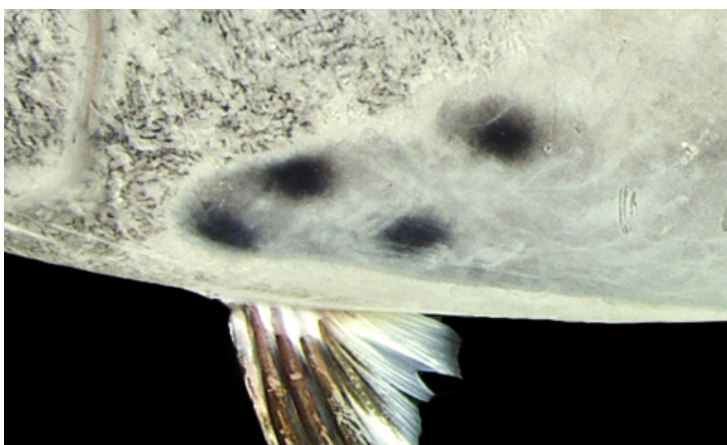
スマ属 *Euthynnus affinis* (Cantor, 1849)

スマ 珍しさ★★



■ スマ *Euthynnus affinis* KAUM-I. 95095, 354.9 mm SL

【解説】体はやや側扁した紡錘形。体背面は黒色を呈し、体側後部の上部には波状斑が多数はいる。胸鰭下方に黒色斑がはいるが、その個数には変異がある。幼魚は体高が低く、胸鰭下方の黒色斑も数が少ない。内之浦湾においては定置網によって時折漁獲され、「ホシガツオ」と称される。身は淡い桃色を呈し、脂肪分に富み、極めて美味。流通することは多くないが、その味の良さからマグロの代替魚としても期待されており、和歌山県や愛媛県においては養殖もなされている（稲生・橘、2016；清家、2017）。(畑 晴陵)



■ スマの黒色斑の数は個体によって異なる（KAUM-I. 95095）



イソマグロ属 *Gymnosarda unicolor* (Rüppell, 1836)**イソマグロ** 珍しさ ★★★★★■ イソマグロの幼魚 *Gymnosarda unicolor* (2007 年 6 月 7 日撮影)

【解説】体は紡錘形を呈し、吻がやや長い。体背面は青みがかった黒色を呈し、体側は銀白色。目立った模様はない。両顎に発達した円錐歯が 1 列に並ぶ。幼魚は吻端が尖り、第 1 背鰭が黄色を呈する。マグロ属魚類の幼魚は吻端が丸いため、本種とは容易に識別が可能である。沿岸海域の表層付近を数個体の群れで遊泳する。最大で尾叉長 2 m、体重 131 kg の個体が韓国で釣獲された記録がある (Collette and Nauen, 1983)。肉は淡い桃色を呈し、刺身などで食される。薩南諸島においては延縄などによって尾叉長 1 m 以上の大型個体が多数漁獲され、「トカキン」などと称され取引される。しかし、内之浦湾を含む鹿児島県本土においては稀な魚であり、2007 年 6 月 7 日に混獲された写真の幼魚が確認されたのみ。(畑 晴陵)

カツオ属 *Katsuwonus pelamis* (Linnaeus, 1758)**カツオ** 珍しさ ★★★★★■ 水揚げされたカツオ *Katsuwonus pelamis* (2009 年 11 月 24 日撮影)

【解説】体背面は青みがかった黒色を呈し、体側は生時、一様に銀色。死後、腹部に細い黒色縦帯が数本現れる。また、漁獲直後など、強い興奮時には、体全体に不明瞭な黒色横帯が数本現れる (写真の個体にはない)。世界中の暖海に分布し、広範な海域を回遊することが知られるが、その経路に関しては不明な点が多い。カツオが日本に現れる経路は、東シナ海から黒潮流路に沿うもの、太平洋から九州・パラオ海嶺に沿うもの、伊豆諸島・小笠原列島に沿うものの 3 経路があり、また 20 度以下の冷水塊を避けて回遊することが知られる (清藤、2014)。食用魚として極めて重要であり、刺身やたたきなどにされるほか、多くが鰹節に加工される。トカラ列島や奄美群島においては延縄によって多数が漁獲され、枕崎など県内各地に水揚げされる。内湾環境にある内之浦湾に進入することは少ないと思われ、極めて稀に定置網に入る程度であり、内之浦漁港に水揚げされることも少ない。(畑 晴陵)

グルクマ属 *Rastrelliger kanagurta* (Cuvier, 1816)

**グルクマ** 珍しさ ★★★★★



■ グルクマ *Rastrelliger kanagurta* KAUM-I. 82835, 252.6 mm SL

【解説】体は楕円形で、側扁する。体側上部は青緑色を呈し、体側中部から体腹面にかけては一様に銀白色。口は非常に大きく、開けたまま泳ぐことで浮遊するプランクトンを捕食する。インド・西太平洋に広く分布し、全長 40 cm 程度に達する。内之浦湾においては極めて稀少で、本調査においても畑・本村（2016c）によって詳細に報告された写真の個体 1 個体（KAUM-I. 82835）が得られたのみ。鹿児島県においては希少な魚とされてきたが、近年、県北部における頻繁な出現が報告されている（畑ほか、2015；畑・本村、2016c）。なお、和名である「グルクマ」はもともと沖縄県における呼称であり、同県においては数多く漁獲され、食用に供される。足が早く、サバ科魚類としては身が柔らかいものの、鮮度のいいものの刺身は非常に美味である。（畑 晴陵）

ハガツオ属 *Sarda orientalis* (Temminck & Schlegel, 1844)

**ハガツオ** 珍しさ ★★



■ ハガツオ *Sarda orientalis* KAUM-I. 86538, 142.9 mm SL

【解説】体はやや細長く、側扁する。両顎には 1 列の鋭く尖った円錐歯をそなえる。体は一様に銀白色で、体背面は青みがかった黒色。体側上部には細い濃青色縦帯が多数はいる。幼魚では、体側に多数の黒色横帯がはいる。成長に伴い横帯が破線状となり、次第に縦帯を形成する。インド・太平洋の広域に分布する。鹿児島県においては吻部が長いことから「キツネ」、あるいは縞模様があることから「シマガツオ」と称されることが多いが、シマガツオ科魚類との類縁性はない。内之浦湾では定置網により漁獲され、「ハガツ」と称される。身は淡いピンク色で、刺身にして美味である。写真の標本は幼魚であり、大型個体は市場に並ぶ。（畑 晴陵）





■ 市場に並びハガツオ。成魚の体には黒色縦帯が多数ある（2011年12月17日撮影）

サバ属 *Scomber australasicus* Cuvier, 1832

**ゴマサバ** 珍しさ ★



■ ゴマサバ *Scomber australasicus* KAUM-I. 73988, 171.4 mm SL

【解説】体はあまり側扁せず、円筒形に近い。体背面は青みがかり、体側中央から体腹面にかけては銀白色。背面には虫食い模様がある。大型個体では体側下部に細かい黒点があるが、小型個体ではこれらの黒点は不明瞭またはみられない。マサバと比較して第1背鰭と第2背鰭の間隔が大きい。全長50 cm程度に成長し、日本各地に広く分布する。マサバと比較して温暖な海域に多い傾向がある。内之浦湾では幼魚から成魚まで定置網や巻網によって大量に漁獲され、大型個体は漁獲直後に脊椎を折り、鮮度の良い状態を保ったまま出荷される。小型個体は「サバ子」と称され、養殖餌料や釣り餌に用いられる。（畑 晴陵）



■ ゴマサバ KAUM-I. 31351, 204.0 mm SL

サバ属 *Scomber japonicus* Houttuyn, 1782

**マサバ** 珍しさ ★★



■ マサバ *Scomber japonicus* KAUM-I. 98176, 277.5 mm SL

【解説】体はやや側扁する。体背面は青みがかり、体側中央から体腹面にかけては銀白色。背面には虫食い模様がはいる。体サイズを問わず、体側下部に小黑点がない。フィリピン以北の西太平洋、ハワイ諸島、およびアメリカ・カリフォルニア州沿岸に分布し、ゴマサバよりも低水温を好む（中村、1997a）。内之浦湾においても大量に漁獲されるものの、その量はゴマサバと比較してやや少ない。「平サバ」、「本サバ」と称される。大型個体、小型個体共にゴマサバと同様に利用される。ゴマサバと共に刺身や酢締めで極めて美味。（畑 晴陵）



■ マサバ *Scomber japonicus* KAUM-I. 74766, 204.1 mm SL (上), KAUM-I. 43928, 188.7 mm SL (下)





■ 市場に並ぶ多量のマサバ  
(2017 年 1 月 11 日撮影)

サワラ属 *Scomberomorus niphonius* (Cuvier, 1832)

**サワラ** 珍しさ ★



■ サワラ *Scomberomorus niphonius* KAUM-I. 93899, 378.0 mm SL

【解説】体は細長く、側扁する。体背面は暗い青緑色を呈し、体側から体腹面にかけて銀色を呈する。体側中央に2～3列の水玉模様が並ぶ。和名は体が薄いことにちなみ、小型個体は「サゴシ（狭腰）」、大型個体は「サワラ（狭腹）」と称される。日本近海においては1980年代までは東シナ海がおもな漁場であったが、1990年代以降減少し、日本海における漁獲がおもとなっている。日本海においては発生後3年で尾叉長約80 cm、体重3.8 kgに達し、尾叉長60 cm程度で成熟、東シナ海に移動して産卵するとされている（京都府農林水産技術センター海洋センター、2012）。内之浦湾においては定置網によって「サゴシ」、「サワラ」とともに多数が頻繁に漁獲される。関西や山陽地域では九州以上に盛んに消費され、西京焼きなどおもに賞味されるが、鮮度の良いものは刺身でも極めて美味である。（畑 晴陵）



マグロ属 *Thunnus albacares* (Bonnaterre, 1788)

**キハダ**

珍しさ ★★★★★



■ 市場に並ぶキハダ *Thunnus albacares* (2007 年 2 月 20 日撮影)

【解説】体側中部と胸鰭を除く各鰭が金色を呈し、成魚では第 2 背鰭と臀鰭が伸長する。腹部には白色の細い斜帯が多数ある。昼間は水深 50 m 付近に多く、稀に 200 m 以深にも現れるが、夜間は表層に多く出現することが知られる（太田ほか、2002）。キュウリエソやハダカイワシ類など、遊泳性深海魚を多く餌とすることが知られる（近藤、2008）。世界中の暖海に広く分布し、トカラ列島や奄美群島においては延縄により多数が漁獲されるが、内之浦湾における漁獲は少なく、稀に定置網による漁獲が確認される程度。「キハダマグロ」の名で流通することが多いために勘違いされることもあるが、標準和名はキハダ。（畑 晴陵）



■ 市場に並ぶキハダ  
(2011 年 5 月 21 日撮影)



マグロ属 *Thunnus orientalis* (Temminck & Schlegel, 1844)**クロマグロ** 珍しさ ★★★★★■ 市場に並ぶクロマグロ *Thunnus orientalis* (2005 年 12 月 14 日撮影)

【解説】胸鰭が短く、その後端は第 2 背鰭起部直下に達しないことにより、日本産同属他種と容易に識別される。幼魚の体側下部には細い多数の白色横帯がはいる。北緯 5 ～ 40 度にかけての太平洋に広く分布する。日本近海から太平洋を横断してカリフォルニア近海まで回遊したのち、再び日本近海に戻る、という広範な回遊をおこなう個体の存在が知られる（岩井ほか、1965；中村、1997b）。言わずと知れた高級魚であり、トロや赤身と称される筋肉部のほか、内臓や眼球なども食される。鮮度が良いものは血合いも美味。大型個体の皮を湯引きにしたものも極めて美味である。乱獲による資源量の低下が懸念されており、近年では養殖も進められている。内之浦湾における漁獲は少なく、またその多くが体長 1 m 未満の幼魚（鹿児島県内では一般に 10 kg 未満のマグロ類を「シビ」と総称するが、クロマグロの幼魚に関しては「メジ」、「メジマグロ」、「ヨコワ」と称する）であるが、時として 10 kg 以上のやや大きめの個体が水揚げされることもある。ただし、本種は 200 kg をゆうに越える大型種であり、400 kg を越える個体も記録されているため、内之浦で水揚げされる個体は本種としてはまだ小型魚といえる。ちなみに日本産マグロ属 5 種のなかで本種は唯一和名に「マグロ」が含まれる種である。（畑 晴陵）

■ 水揚げされたクロマグロ *Thunnus orientalis* の小型個体 (2012 年 10 月 2 日撮影)





■ 水揚げされたクロマグロ *Thunnus orientalis* の小型個体(2004年11月18日撮影)

マグロ属 *Thunnus tonggol* (Bleeker, 1851)

**コシナガ** 珍しさ ★★★★★



■ 水揚げされたコシナガ *Thunnus tonggol* (2009年11月24日撮影)

【解説】体背面は青みがかった黒色を呈し、クロマグロに似るが、胸鰭が長く、その後端が第2背鰭起部直下に達する(クロマグロでは達しない)こと、体側下部に前後方向に長い楕円形白色斑が多数散在する(幼魚の体側下部に背腹方向に長い白色斑がはいる)ことなどにより識別される。また、マグロ属の中では唯一、鰺(うきぶくろ)をもたない。最大でも全長1 m程度の小型種で、60 cm程度で成熟することが知られる(Griffiths et al., 2011)。吸水卵を含む卵巣をもつ個体が漁獲されていること、発生後33～132日とみられる個体が見られていることから、日本近海における産卵の可能性が指摘されている(伊藤ほか、1999)。近年は日本海西部において多数が漁獲されているが(小林、2004; Mohri, 2014)、太平洋に面した内之浦湾における漁獲は極めて稀。味は良いものの、他のマグロ属と比較して流通量は極めて少なく、また小型種のためマグロ属としては安価に扱われる。(畑 晴陵)



■ コシナガの特徴である腹部の白色斑(2009年11月24日撮影)